
3rd-Real

音祇 レンド

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

3rd-Real

【Nコード】

N1409S

【作者名】

音祇 レンド

【あらすじ】

『センチリア・オンライン』。それは五感全てが実装された前代未聞のVRMMORPG。

『第二の現実』と呼ばれるほどのリアリティを売りに世界中の人々を魅了した。

主人公『ヴィネル』は攻撃スキルを持たない俗に云うネタ職業『道化』を極める酔狂なプレイヤー。

だが彼がその道を選んだのは決して伊達や酔狂では無かった。サービス開始以来、誰も使いこなせていない最強職『凰鬼』を操るため

の布石だったのだ。

最強の名を欲しいままにするために彼は満を持して転生するが……
彼が目覚めたのは見知った世界では無かった。

ここは何処なのだろう？ いや……それよりも自分は誰なんだ？

記憶を失って困惑し焦る彼の目の前に音を立てて現れたのは、一つのシステムログ。

【クエストを受理しました『メインクエスト・失われた記憶』】

そうして『第三の現実』を舞台にした彼の物語の幕は切って落とされた。

ブローグ

『センチュリア・オンライン』今や一般的レベルで普及した仮想現実機構、通称『VRS』技術を使用した体感型のMMORPG。当然、ユーザー数は他のゲームと比べても格段に多く、軽く億は超す数を誇っている。

とは言うものの、別のゲームと比べても舞台設定やシステムに大きな違いがあるとは言えない。街があり、NPCが居る。ダンジョンがあり、モンスターが居る。

プレイヤーは100を超える職業を選択し、アイテム生産に勤しんだり、モンスターを狩ったり、プレイヤー同士の戦いを楽しむ。確かに自由度は高いのだが、それはどのゲームでも言えることだ。それでは何故これほどの人気を誇るのか。それは数あるVRMMORPGの中でこのゲームは一線を画している部分があるからだ。

前代未聞である、五感全ての実装。

料理を食べたときの味覚から、物に触れた際の触覚、果てはダメージを受けたときの痛覚に至るまで忠実に再現しているのだ。

極限まで追求したりアリティ。前情報の段階でそれが知れた際の反響は凄まじい物だった。

要するに彼らは皆、飽いていたのだ。

美味いと感じるのだが、何処か現実味の無い味。同じ岩に触れば同じ感触が伝わり、ダメージを受けても少し衝撃が走ってHPが減るだけ。

もっと現実味のある『非日常』をユーザー達は渴望していたのだ。

そして、その渴望は満たされることになった。

同じスキル、同じ材料で作った料理も、作り手や食べる側によって味覚に変化が感じられる。

家の壁から石ころ一つに至るまで、まるで天然物のように感じる感触。

そして——剣で斬られれば、実際に体を斬られるようなりアルな感覚に加え、現実となんら遜色ない痛覚が与えられる。

『第二の現実』そう、その世界はまさに、もう一つの現実世界と呼ぶに相応しい世界だった。

道化が終わる日？

六畳一間程度の広さしか無い木造部屋。備え付けのベッドと机以外は本当に何も無いこの部屋は異常なほど生活感が無い。それもそのはず、この部屋の主にとってここはただのスタート地点でしかないのだ。

突如、何の前触れも無く最奥の窓際の空間が歪んでゆく。次の瞬間には少年とも、青年とも呼べる男が立っていた。

【ようこそ、センチュリア・オンラインへ！】

聞き慣れた自動アナウンスの声を受け、彼は閉じていた目を開く。その容姿は様々な意味で人目を引く物だった。

体の正中線を中心に左右で黒と白できっぱりと分かれている道化師のような格好。

三角錐を二つくつつけたような帽子から垣間見える髪の毛は虹の七色で綺麗に彩られている。

化粧でもすれば女性と見間違いそうほど整った相貌。左目から頬にかけては逆五芒星と涙のような赤いメイクが施されている。

元の上質な素材をいっそ見事と言えるまでに服装とアクセサリがぶち壊した結果な彼のプレイヤーネームは『ヴィネル』。このゲームで唯一『道化』を極める酔狂なプレイヤー。

「さあさ、今日も張り切って狩るとしますかー」

ヴィネルは呟きながらインベントリ・ウィンドウの表示を頭の中で指示する。ポップアップするように現れた半透明な水色のウィンドウには彼の所持するアイテムが表示されている。

インベントリとは所謂、見えないカバンのようなものだ。このゲームではアイテムを所持する場合、このインベントリに収納することが出来る。出し入れは頭の中で指令を出すだけで出来る優れたものだ。

ただし、あくまで『見えない』だけなので重量はそのまま自身に降りかかってくる。

筋力上昇のスキルを取れる職業や高レベルならともかく、初期状態のままだと下手すれば押しつぶされて文字通り地を這う事になる。誰もが初心者頃は何度か経験するものだ。

インベントリの中には消耗系のアイテムが殆ど残っていない。そういえば買出しをせずにログアウトしたっけ、とヴィネルは思い返した。

どうやら狩りに行く前にひとまずアイテムを買いにマーケットに行く必要がある。

ヴィネルはひとまずの方針を固めて部屋を出た。

同じような扉が並ぶ廊下を歩き階段を下りるとこの宿屋の一階へとたどり着く。外への扉に向かっていている途中でカウンターから声をかけられた。

「こんにちは、今日も冒険ですか？ 頑張ってくださいね！」

この宿屋の看板娘が釣られて笑顔になりそうなのとびつきりな笑顔で見送ってくれる。

何処からどう見てもプレイヤーと遜色ないのだが、なんとその正体はNPCだ。

このゲームの欠陥というより、不便な点の一つにNPCとプレイヤーの判別がしにくいことが上げられる。見た目では殆ど区別出来ない。

このNPC達は高性能AIを搭載している上に日々学習し進化も

するのだ。

世間話に応えることも出来るし、街中ではNPC同士が噂話に興じてる光景も見受けられるくらいだ。

ヴィネルはNPCである彼女に対し適当に返答しながら宿屋の外へ出た。

宿屋を一步外に出た途端に通りの喧騒が耳に届いてくる。

内容は店の呼びこみだったりパーティの募集だったり様々だ。まるで中世真っ只中のような建物が並ぶこの街は大多数のプレイヤーが活動する中心地だ。

この街に設置されたワープポータルを利用すれば大抵の場所には飛べる故に初心者から上級者まで幅広く集まっている。

様々な格好のプレイヤーが行き来する通りをヴィネルはマーケットに向けて歩き出す。

マーケットとはその名の通り商店や露店の集まっている場所だ。消耗系のアイテムをはじめ、武器や防具、その材料や設計図、レシピなど様々な物が売り買いされている。

初心者用のコモン級アイテムから上級者用のユニーク級アイテム、ゲーム内でたった一つしか存在しないレジェンド級アイテムとその幅は広い。

マーケットに踏み込むとより一層喧騒が強くなる。

ヴィネルは決まった足取りでいつもの場所へ向かう。

人が密集するマーケットの中でも一際密度の高い中心の広場。いつも同じ場所で露店を構える商人をヴィネルは見つけた。

筋肉質な体と伸び放題のヒゲが特徴の男、よく『鍛冶師』に間違われる事が多いが高レベルの『錬術師』だ。

彼らは一般のアイテムの効果を強化することの出来るスキルを持

っ。

アイテムが無ければ戦闘をこなせない『道化』には彼らが神にすら見える。

「よう、マーク！　いつものをよろしく」

「ん？　ああ、なんだヴィネルか。ちゃんと品名と個数を言え」

ヴィネルが気さくに話しかけたというのにマークはいかにも頑固オヤジのような表情で応える。

慣れているためかヴィネルはそれを気にする様子は無い。

「相変わらず律儀だなあ。お得意様にくらいは良い顔してもいいだろうに……強化松明50個と強化爆弾20個、後最高級ポーシヨン50個ね。代金はいつもと同じ200金で良いか？」

「ああ……しつかしテメエは本当に金払いがいいな。松明や爆弾なんて欲しがるのはお前だけだが、材料費と錬術の代金合わせてもせいぜい50金行くか行かねえかだぞ？」

確かにそのとおりだ。松明は銅貨10枚、爆弾は銅貨100枚――つまり銀貨1枚でNPCから買える。

しかしわざわざ錬術する手間を考えると別に200金位払っても別に構わないとヴィネルは考えていた。

「んー……専用アイテムを用意してもらってるような物だからね。あと、俺のこと馬鹿にしないし？」

「ふん、道化を演じるテメエはつまんねえ。さっさと最強になって俺に貢げ」

「今でも十分に買いでると思うがなあ」

別のオンラインゲームで知り合っで以来の仲であり、今では完全なネタプレイに走っているようにしか見えないヴィネルをマークは応援してくれていた。

ヴィネルはインベントリから出した金貨袋を渡して注文の品を受け取る。

他に客もいないので軽く雑談をしていると、背後から響いた怒声に一瞬ビクリと体が跳ねた。

ヴィネルは喧嘩でもしてるのかな、と軽い気持ちで振り向くとそこにはメタリックブルーの鎧を着た『竜騎』の男を息荒くしながらヴィネル達の方を睨みつけていた。

考えること数秒。後ろを振り向いてもマークしかない。しかし男はヴィネル達の方を見て怒っているようだ。だがヴィネルはその顔に見覚えはない。ヴィネルはすぐに結論が出た。

「なあ、マーク。お客さんみたいですぜ」

「てめえだよ、この道化野郎！ とぼけんじゃねえぞ、あゝ あ！？」

「ええっ！？」

即座に殺気を十二分に満たした怒声がたたきつけられ、困惑するヴィネル。

背後から呆れたような声でツツコミが入る。

「おい、ヴィネル。テメエの客じゃねえか」

「客……えっと、ジャグリングでも見たいとか？ だが残念ながら

『道化』にはその手のスキルが無くてなー、いやごめんね、ほんと」
ヴィネルが割と本気でそう言った途端、男は右腕を大きく振りかぶる。

「——『絶冷槍ニヴルヘイム』！」

声と同時に何も無い男の手元が歪む。次の瞬間には冷気を纏う水色の長大なランスが握られていた。

「え、ちょ、嘘!？」

「——おらあつ!！」

力任せに放たれた穂先はヴィネルの腹腔をかき乱し、内臓器を刺し貫いてその体を通して——する前に六角形を連ねたような障壁で阻まれていた。

PVPエリア以外では基本的にプレイヤーからプレイヤーへの攻撃は干渉しない。

これは街から外に出ても通用するこのゲームでの基本的なルールだ。

「……邪魔みてえだからどいとくぞ」

そう言ってマークはヴィネルの背後から野次馬の群れへと去っていく。

しかもヴィネル達の周囲にあったはずの露店はいつの間にか既に片付き、店主たちはヴィネル達を取り囲んで野次馬と化している。

このような事態に陥ったことに対してヴィネルは全く心当たりがなかった。

「えっと……どちら様でしょうか？」

いきなりランスで突かれたことよりも、周囲の注目に恐縮しながらヴィネルは問いかける。

だが相手は穩便に済ます気は毛頭無く、返答は吠えるようにして行われる。

「ナメてんじゃねえぞ、ヴィネル！ とぼけてねえで俺のゴルゴンランスを返しやがれ！！」

「ゴルゴンランス……？ というかアンタの顔が俺の記憶に無いからきつと妄想か被害妄想か幻想だと思います。冤罪で訴えるぞ、コノヤロウ」

身に覚えの無いことで何故自分が、と若干腹を立てたヴィネルは早口で言葉を紡ぐ。

その時、この場に居る誰もが ブチツ、と何かが切れる幻聴が聞こえた。野次馬の輪が徐々に広がりを見せる。

「4日前……慟哭の迷宮で……テメエは俺を後ろから不意打ちして『K・O』した拳句にドロップした俺のランスを奪いやがっただろうがあああああああ」

言い切ったところではあはあと荒い息を吐く男。

ヴィネルはそこでようやく記憶を掘り起こす事に成功した。そう、ヴィネルは確かに背後からの不意打ちで倒していた。

しかし、ヴィネルの記憶にはやけに高価な物落としたな、という印象しか残っていない。

それもそのはず、ヴィネルはGPSマップ上に現れた敵マーカ―

目掛けて攻撃していたのだ。

距離にして射程範囲ぎりぎりの15メートル。照明魔法や松明を使用しても5、6メートルしか先を見通せない『慟哭の迷宮』ではその敵がプレイヤーだったのか、モンスターだったのか判断が出来なかった。

現在の状況をようやく把握したヴィネルは笑みを浮かべて口を開いた。

「それで？」

「……………は？」

「それがどうかしたか？ 慟哭の迷宮はPVP認可エリア。負ければ装備アイテムドロップもありうるって知らないわけじゃないだろう？ ああ、後返すのは無理だ。つい2日前に売り払っちゃったしよ」

先ほどまでと打って変わって冷笑を浮かべるヴィネルがそう言う
と野次馬はがやがやと騒ぎ立て始める。

事態を静観していた彼らにとってヴィネル達の会話は全くの予想外の物だった。

「冗談だろ？ 『道化』が『竜騎』に勝てる訳ないっての」

「でもあの『竜騎』の様子見ろよ…………マジっばくね？」

「『道化』に？ あの『竜騎』結構レベル高かったはずだけど…………」

『竜騎』の男は息を整えたら頭が冷えたのか急に無表情になった。
次いで、インベントリから一枚のカードを取り出しヴィネルに突

きつけてくる。

それはプレイヤーのステータスや経験値などの情報が刻まれたIDカード。

これから行うある行為に必要な道具。

「『決闘』だ」

「……へえ？」

「分かせてやるよ……俺が『道化』なんかに負けるはずが無いってよお！」

『決闘』の申し出。ヴィネルはこの展開に思わずガッツポーズをしそうになる。

『決闘』とは非PVPエリアで対人戦が可能となるシステムだ。勝てば一般のPVPエリアでプレイヤーを倒すよりも莫大な経験値が手に入る。しかし、負ければ多大な経験値を失う。高レベルになればなるほど忌避されるシステム。

ヴィネルはインベントリからIDカードを取り出し所有経験値を確認する。パーセンテージで表されるそれは99.95%を表示していた。

残り僅かのように思えるが、この数値を100%にしようとする毎日狩りを続けて2週間は確実にかかる。最後は派手に行こうかな、とヴィネルは密かにほくそ笑んだ。

元来から彼は派手な事が大好きなのだ。

ヴィネルは静かにIDカードを同じように突きつける。

「いいぜ。その『決闘』、受けて立とう」

ヴィネルの宣言と同時に地面が光を放ち魔方陣が描かれる。

システムによって作られた透明な強固なバリアが内外を隔離する。あつという間にマーケットの中心に即席のバトルフィールドが出来上がった。

【運営管轄PVPシステム『決闘』の起動を確認。これより公式ルールによるPVPを開始します】

フィールドの中央に浮かび上がったのは『Judge』と刻まれた四角いカード。

通称ジャッジ。『決闘』の勝敗判定や司会を務めるシステムだ。さらに野次馬達とはたんに騒ぎ始める。

恐らく両者高レベルであろう『決闘』に誰もが興奮し囃し立てる。

【PVP中は回復アイテム・回復魔法は禁止となります。これを認めますか？】

「認める！」

「認める」

【敗者から勝者には相応分の経験値が移譲され、敗者は装備アイテム、インベントリの中からアイテムをドロップする確率が発生します。これを認めますか？】

「……認める」

「ふふっ……同じく」

男は即答はせずに苦虫を噛み潰したような表情で絞りだした。それに対してヴィネルの相貌には思わず嘲笑が浮かんでしまう。ぎり、と歯噛みする音が誰もの耳に聞こえてくるようだった。

【それではこれより『竜騎』《蒼穹の騎道》ファルガ Lv・14
1 VS——】

ジャッジが職業・装備称号・名前・レベルの順で読み上げる。

装備称号は様々な条件を満たすことで獲得出来る称号であり、装備することで特殊効果を発揮する物も存在している。

現行のレベルキャップが150なのでLv141と言えば普通に高レベルに区分される。

さらに言えば、カンスト組と呼ばれるβテストに参加し育成方法や方針、選択する職業を決めていた者達以外で限界値のレベル——所謂カンストに到達している者が少ない現状で140代はかなりの物だ。

外野がざわざわと騒がしくなり始め、どちらが勝つかなどという賭けもやっているようだ。

言わずもがな『道化』の勝利は大穴扱いだ。

【『道化』《炎獄の超越者》ヴィネル Lv・149 のPVPを行います】

しかし、ヴィネルの紹介がされた瞬間、周囲の音が死んだ。

音が一気に止んだせいで耳が異常をきたしたかのような錯覚を受ける者もいる。

『竜騎』の男——ファルガは呆然とした表情でヴィネルを見ている。

分かりやすく動揺する外野の声がやけに響く。

「『道化』でカンスト直前!? ありえねえ……夢でも見てるのか?」

「しかもあの称号……確か炎系統の累積与ダメージでワールド1位だったよな」

「『道化』で炎!? 攻撃すらままならないはずだろう!？」

《炎獄の超越者》は装備すると炎をある程度意のままに操ることが出来る便利な能力を付与する称号だ。

ヴィネルは特に意図する事無く取得していた。それは、彼が選んだ『道化』の戦い方が導いた結果だろう。

【カウントスタート、3、2、1――】

野次馬を完璧に無視してジャッジはカウントを始める。

ファルガは我に返りランスを構えず。

『竜騎』は騎乗用の竜を召喚するスキルを持っている。

召喚出来る竜の種類は3種。飛、地、水、それをまず判断する必要がある。

バトルフィールドは狭いがそれでも飛ばれると面倒だとヴィネルは思う。

傾倒する属性と召喚を潰すために、とりあえず先手は取るとヴィネルは方針を固めた。

「な、何がカンスト直前だ……所詮は『道化』だろ? この俺が――」

【It's Show Time!!】

「――攻撃スキルの無い職に負ける訳がねえだろうが!！」

「アハハッ！！　その『道化』にアンタは負けるのさ！」

ヴィネルはそう哄笑し、松明を一本だけインベントリから取り出して走りだした。

道化が終わる日？

『道化』は攻撃スキルを持たない。いや——アクティブスキルを持たないと言ったほうが正しい。

このゲームでステータスは職業とレベル依存でありプレイヤーは弄ることはおろか見ることもすら出来ない。プレイヤーが唯一思いどおりに出来るのは職業事に存在する固有スキルだけだ。

そのスキルは大きく二つに分けられる。

一つ目は攻撃や回復魔法などプレイヤーの意思で発動させるアクティブスキル。

攻撃スキルを使用すればそれだけ強力な攻撃を加えることが出来る。超速の連撃で上下左右から同時に斬撃を放つことや、小山ほどある竜の一撃に押し勝つような拳撃だってお手の物だ。

回復魔法や攻撃を強化させるバフスキルもアクティブスキルの内に分類される。

二つ目はプレイヤーの意思とは別に恒常的に効果を得られるパッシブスキル。

一般的なのは筋力強化などのステータス強化系だ。スキルを取得するだけで効果が発動するのでとりあえず取っておいて損はないスキルと言えるだろう。

そして『道化』にはアクティブスキルが存在しない。

それはつまり、取得出来るスキルにパッシブスキルしか存在しないのだ。

数多の職業と見比べてもアクティブスキルが存在しないのは『道化』だけだ。

そしてこのゲームでアクティブスキルはプレイヤーのレベルを上げるのに最も重要な要素となっている。

『鍛冶師』なら剣や防具の作成、『調合師』なら回復薬の作成、というように生産系の職業はそれらのアクティブスキルを使用することで経験値を得て、自分のレベルを上げることが出来る。

ただし『竜騎』や『聖人』といった戦闘系の職業は戦闘による経験値の獲得でしかレベルを上げることが出来ない。

もしも大道芸などのアクティブスキルが『道化』に存在するならば、それらしく大道芸でレベルを上げることにも出来ただろう。

だが、その道が封じられている故に、『道化』は敵モンスターやPVPなどで直接経験値を得ることではレベルを上げることが出来ないのだ。

加えて『道化』には武器を満足に操れるようなステータスも存在しないと来たものだ。

アクティブスキルが無いのでステータスに任せた殴りや蹴りという通常攻撃で戦うしか無い『道化』をパーティに組み込むという者は存在せず、いつしか『道化』は嘲笑の対象となっていた。

攻撃系スキル、生産系スキル、道楽系スキル無し。

だがヴィネルは、この『道化』に最強へと至る道を見た。

そのためには先ず、レベルを150——現在のカンスト値であり他職への転生を可能とする域まで上げなければならない。

己が最強の形を魅せるため、ヴィネルは松明に着火の意思を伝えた。

ボツ、という音とともにゆらゆらと松明の先に火が灯る。錬術によつて強化されているため、普通の松明より明るく輝いているはずなのだが昼間なので大した差は感じられない。

松明は主に光源の無い暗い洞窟で重宝されるアイテムだ。

照明用だが持って殴ったり投げすることも出来る。そう、これがヴィネルの主要武器だ。

ヴィネルは松明を片手にファルガとの距離を詰める。ターゲットまでの距離をシステムが正確に測り27メートルだと表示する。

ファルガは一直線に向かってくるヴィネルを見据えて重心を低く構えている。

カウンター狙いのように見えるが関係無い。

ヴィネルはランスの射程範囲に入る気など最初から毛頭無かった。

ヴィネルとファルガとの距離が15メートルを切る。

15メートル——ヴィネルが松明を投擲して『必中』する事が出来る射程距離だ。

ヴィネルは松明を振りかぶると出来るだけコンパクトなモーションで投擲する。

目に見えて当たっても大したダメージは無いと言える攻撃は若干の弧を描きながら飛ぶ。

当たる。ヴィネルがそう確信したと同時にファルガの唇が動いた。

「——『ウォーターウォール』」

言葉と同時、ファルガの眼前に分厚い水壁が出現し松明の炎をかき消す。

『ウォーターフォール』は水系統の魔法で物理的な防御力は殆ど

無いが魔法、特に炎系統に大しては天敵とすら呼べる魔法だ。

ヴィネルはそこからファルガが水の扱いに特化した『水竜騎』だと判断する。それなら竜を召喚しても大して意味はない。

だが、まさか松明をそんな大げさに潰してくるとは思わず、そこで思考が滞ってしまう。

そんなヴィネルの隙をファルガは見逃しはしなかった。

「——『バインドジェイル』！」

ヴィネルの足元に魔方陣。しまったと思うよりも速く水で出来た四角い檻がヴィネルを囲む。

ファルガがランスを振りかぶっているのがその目に映る。投擲して串刺しにするつもりだ。

「はあっ！！」

気合とともにランスが投擲された。

超速のそれはヴィネルの目にかろうじて捉えられるが、水の檻に囲まれているため左右への回避行動が取れない。

ドスッ、という重い音と共にランスが檻に突き刺さる。

ヴィネルはそれを地面に這いつくばって回避した。

だが、まだ攻撃は終わっていなかった。パキパキ、と音が鼓膜を叩く。

頭上を通るランスを見てヴィネルは表情を凍らせた。

氷——音の正体はランスが発する冷氣によって水の檻が凍る音だったのだ。

急速に凍結しながら檻は中にいるヴィネルに向けて無数の槍を形成する。

竜騎の上位スキル『ジェイルスキュア』だ。バインドジェイルから派生するスキルで中に居るターゲットに向けて無数の槍で刺突する。

さらに水属性のそれが武器の水属性によってさらに強化されている。

唯一高レベルらしく高い体力は残るだろうが凍結状態では為す術も無く負けるだろう。

ヴィネルは起死回生の一手に賭けるべくインベントリから爆弾と松明を取り出すが――

それよりも早く、無数の氷の槍がその無防備な背へと殺到した。

勝った。ファルガはそう確信して背を向ける。
まだ体力は残っているだろうが氷属性を付与した無数の槍撃。
その激痛に『K・O』は間違いないと判断する。

センチリア・オンラインの独特なシステムに『K・O』という物がある。

これはプレイヤーがダメージを負った際に体力が残っていても戦闘不能とするシステムだ。

その判定はプレイヤーの意識の途絶――つまりところ気絶だ。

このゲーム、前代未聞となる五感全てが搭載されている。

この中で最も重要なのが『痛覚』だ。

斬られれば本当に斬られたような感触と激痛が走る。

この『激痛』に耐え切れなくなり意識を手放すと『K・O』となるのだ。

PVPの決着は大抵この『K・O』で決まる。

思わず先日の光景が目には浮かび歯噛みする。

思い返されるのは屈辱とも言える、あのシステムログ。

【敵勢プレイヤー『ヴィネル』に討ち果たされました。使用武器『松明』】

松明。それは周囲を照らすための照明用であって断じて武器ではない。

殴れば物理ダメージや炎属性ダメージがあるだろうが微々たる物だ。

そんな物をわざわざ使って倒した挙句、ドロップしてしまった武器を奪われた。

絶対に許せねえ。そうファルガは誓って『ヴィネル』について情報を集めてみるとすぐに集まった。

曰く、最低職『道化』を極める酔狂なプレイヤー。

それだけで十分だった。街を歩けば『道化』の格好は一目で分かる。

しかもプレイヤー人口は異常なほど低い、というよりいらないと言っても過言ではない。

案の定最初に見つけた『道化』がヴィネルだった。決闘を挑み、そして勝った。

何のことは無い。PVPエリアで巨大な炎で奇襲され為す術も無く『K・O』されたのは恐らくペアやパーティだったのだ。

奴はそうやって誰かに寄生してレベルを上げたのだろ。そうでなければ攻撃スキルの無い『道化』でモンスターが倒せるはずがない。

ファルガはそうに違いないと決めつけ、同時に不審に思った。

(……何故だ？ 何故ジャツジは俺の勝利を宣言しない？)

まさかと思いファルガが肩越しに振り返った瞬間のことだった。

腹に響くような爆音と共に、今や完全に氷と化した檻が爆砕され四方八方に吹き飛ぶ。

同時に起こったのは紅蓮の炎。『魔法師』の上位ランクの炎が檻があつた場所に渦を巻く。

ありえない。道化に攻撃スキルは無いのだ。

さらに爆弾などの攻撃アイテムもあそこまで強力な物は存在しないはず。

(い、一体何が起こってるんだ!?)

「げぼつげぼつ……自爆なんてするもんじゃねえな。お陰で体力がヤバイ」

唇を笑みに歪ませながら炎からヴィネルが現れる。

火傷、凍傷、服はボロボロで左目からは血を流している。その姿は地獄の道化とも呼ぶに相応しいものだった。

「な、なんで『K・O』しないんだよ……」

意識を手放せば痛みは無くなってペナルティは受けるが復活出来

る。

文字通り死にそうなほどの痛みが走っているはずなのに軽い調子で声を出すヴィネルにファルガは純粋な恐怖を抱いた。

「ああ、それは無い。悪いね、俺に『K・O』は存在しないんだ」

「……なんだと？」

「パッシブスキル『ペインロスト』。俺は常時痛覚無効状態なんだよ」

『ペインロスト』は『道化』のパッシブスキルだ。効果は痛覚の低減。しかし、ヴィネルは今『無効』と言った。

「な……情報じゃせいぜいカット出来るのは50%って……」

「そりゃスキルレベル20程度の話だろ？俺は『ペインロスト』をMAXの50まで上げてるんだよ」

そう、『ペインロスト』を極めることで得られる恩恵は痛覚の100%を無効にする。

常時痛覚を排除した状態のヴィネルに『K・O』は存在しない。

このゲーム、プレイヤーのレベルが1上がるごとにスキルポイントを1もらえる仕様になっている。

つまりヴィネルはレベル50分のポイントを一つのスキルに注ぎ込んだと云うのだ。

ヴィネルは火のついた6本の松明で器用にジャグリングをし始める。

スキルでは無く、単純にヴィネル本人の技量によるものだ。

そこでファルガはふと思い出した。

道化の無駄に豊富なパッシブスキルの中には属性強化もあったはず、と。

（もし、それで松明の炎を強化出来るなら……まさか！）

「ハッ！ 気づいたかな？」

ゴウツ！ 松明の炎が『魔法師』が使う上級火炎魔法とほぼ同じ勢い燃え盛る。

この勢いではファルガの『ウォーターウォール』では止めきれない。

ファルガは身を焼かれる痛みを想像して総毛立った。

「『業炎極化』……効果は見ての通り、使用する火炎属性の強化。コレはまだレベル49だが……十分な火力だろ？」

49……無茶苦茶なスキル振りである。

カンストしてもスキルポイントは150までしか取得出来ない。

他のスキルを必要無いと切れなければそんな振り方は出来ないだろう。

だが、もしかしたらアクティブスキルが無いことで迷う必要が無かったのかもしれない。

あるいは、また別の理由か……。

「さあ、幕を引こうじゃねえか！」

掛け声と共に6本の巨大な炎を灯す松明が放物線を描いて投擲さ

れる。

しめた。ファルガはそれで再度勝利を確信する。

ファルガは炎の下を地を這うように走り松明を回避する。

ヴィネルの体力は既に限界に近い。

ファルガはまだ槍を回収していない状態だが、素手の通常攻撃でもなんとかなる域にある。

ファルガはニタリと不気味に笑うヴィネルに向けて一息に飛びかからんとする。

だが……ファルガは背後に迫る熱に否応無く振り向かされた。

「っ——！！」

ファルガは声すら出なかった。その背後には、躲したはずの松明の炎がまるで追尾でもしてきたかのように迫っていたのだ。

轟音を上げて炎がファルガを包みこむ。

鎧の防御力を無視して暴れる炎に、ファルガの体は焼かれていく。

松明——否、アイテム攻撃の恐ろしさはある一点に絞られる。それは『防御力無視』という特性。

他のゲームでは一定のダメージを受けて終了だろう。だが、このゲームには痛覚が搭載されている。それが最も厄介だった。

このゲームにおいて『防御力』とはプレイヤーにとって最も重要なステータスの一つだ。

その理由として防御力を上げることと痛覚が軽減されるという事が上げられる。

だからプレイヤーは誰もが物理、魔法、それぞれを受けて『K・O』されないために防御力に磨きをかける。

だが、そんな防御力をアイテム攻撃は無視してしまうのだ。あまつさえ炎システムを強化したヴィネルの攻撃ではまず間違いなく耐え切れないと言える。

あまりの激痛に叫ぼうとファルガは口を開くも逆に肺も焼かれてしまう。

体力はまだ残っているので動こうとすれば動けるのだが、もはやファルガにとってはそれどころではなかった。

「『魔弾』。所謂絶対命中のスキルだね。射程距離内なら飛び道具は確実に命中させることが出来るようになるんだ。コイツもレベル50だね……」

当初は命中率が上がるだけだった『魔弾』が絶対命中になるなどヴィネル以外は誰も想像していなかった。

ファルガはヴィネルの無茶苦茶ぶりに驚愕しつつ、速やかに意識を手放した。

【ファルガ Lv・141の『K・O』を確認。勝者ヴィネル Lv・149】

フィールドが消え去りPVPで負った傷が全快する。ヴィネルに痛覚は感じ無いのだがそのせいで傷の感触が手に取るように分かるのだ。

さらに目玉が潰れたのは初めてでもありその生々しい感触にヴィネルは思わずえずく。

【勝者への経験値移譲が行われます】

倒れるファルガの周囲には何も落ちていない。

彼のランスは既にイベントリの中に回収されたようだ。ドロップ品は無し。

そして経験値を受け取る。IDカードに表示されている経験値ゲージが一気に0・05%も上がったのを見てヴィネルは歓喜する。経験値ゲージはMAXを示す100%を表示していたのだから。

【レベルアップ！ スキルポイントを割り振ってください】

レベルアップを表す光の渦のようなエフェクトにヴィネルは包まれる。

光の残滓が残る中、ヴィネルは『業炎極化』をレベル50に上げる。使用する炎系統のダメージや範囲が更に強化された。

【《カウントストッパー》《クラウンマスター》の称号を獲得しました】

ヴィネルはLv150の到達が条件の称号を二つ獲得する。

と、なにやらひらひらと空から落ちてくる。ちょうど手元に落ちてきたそれをヴィネルは難なくキャッチする。

カード状のそれには黄金のように輝いており『Reincarnation』と刻まれている。

それは転生権の獲得を示すカードだった。

転生はステータスカスキルのどちらかを維持したまま他職になれるシステムだ。

ヴィネルにとって『道化』のゴール地点であり、これからのスタ

ト地点でもある。

思わず哄笑を上げそうになるが、そこでハッと今の状況に気づいた。

大半の予想を裏切ったの『道化』勝利。さらにはその『道化』がカンストしてしまったことでマーケットが騒然となっている。

流石に人の注目を集めすぎたと思ったヴィネルは人の波を避けて走りだす。

早速転生してマークに自慢でもしてやろう。

そうヴィネルは考えながら、何も無い自室へと歩を進めて行った。

転生、そしてエラー（前書き）

短いです。アンバランスで申し訳ない。

転生、そしてエラー

『鳳鬼』センチュリア・オンラインに存在する職業の一つであり、その中でも最強と名高い存在だ。

しかし『鳳鬼』のゲーム内人口は『道化』の次に少ない。

現状では低レベル帯でちらほらと見受けられるが、それらもすぐに断念し他職に転職を余儀なくされている。

βテスト時にヴィネルも挑戦したがあえなく断念することになっていた。

『鳳鬼』には幾つかの特徴があげられる。他職と比較してもずば抜けた超火力。不死とでも呼べるほどの体力量とその自動回復率。

だが、その最もたる物が『物理攻撃無効』の能力だ。

パッシブスキル『炎化』。自身の体を炎に変えることが出来るようになるこのスキルにより剣での斬撃、拳での拳撃、銃による射撃などの物理的な物を完璧に無効化することが出来る。

誰の目に見ても明らかな壊れスキルなのだが、これには致命的な副作用があった。

それは防御力最低値固定。完全な防御力0。

当初は誰も気にしていなかった。物理が効かないのだから防御を気にする必要は無い、と——だがそれは間違いだった。

このゲームにおける『K・O』システムの概念が『鳳鬼』に待ったをかけた。

そう、このゲームにおいて痛覚を緩和させるステータス『防御力』。

それが0に固定されていることが問題だった。

レベルが上がり狩場が上位になればなるほどその仕様が響いた。物理は完全に無効化出来るから問題はないのだが、魔法にはこんな弱い。

魔法攻撃に当たれば一発『K・O』は間違い無し。それほどの激痛が走るため、恐怖に駆られたプレイヤー達は我先にと他職へと転職していった。

どの狩場でも魔法攻撃主体のモンスターと物理攻撃主体のモンスターが入り交じっている中、『鳳鬼』が狩りを行うのは至難の技となっていたのだ。

そうして誰もが認める最強職にも関わらず、誰も使わない。もしくは使っても高レベルまで到達出来ないという現状が出来上がっているのだ。

そんな中、未だに『鳳鬼』を諦めないプレイヤーが一人いた。

『道化』ヴィネル。豊富なパッシブスキルの中に痛覚無効の可能性を見た彼は、転生によるスキル保持で『鳳鬼』の問題点を打破出来ると考えていた。

誰もが机上の空論だと嘲笑う中、それでもヴィネルは『道化』を演じ続けた。

そして今、その苦勞が報われる時がきた。

【転生権の使用を確認。これより『道化』ヴィネルの転生を行います】

殆ど何も無い自室が徐々に色を失い、ついには完全な闇となった。宙に浮いているような感覚にヴィネルは戸惑うも転生を進めていく。

【転生する職業をお選びください】

「『鳳鬼』」

決まりきった答えをするヴィネル。つい到这里まで来たのだと体に震えが走る。

【転生後に保持する方をお選びください】

選択肢が二つ用意されたウィンドウが現れる。

1．ステータス 2．スキル

無論選択肢は決まっている。

「2番」

【現在の所有スキルを保持したまま『鳳鬼』へと転生いたします。よろしいでしょうか？】

「はい」

【処理中です。しばらくお待ちください——IDカードの書き換えを完了致しました】

ヴィネルは新しく更新されたIDカードを受け取る。

無事に終わった、とヴィネルが安心するのとその『異常』が発生するのは同時だった。

【ログイン中…………エラー。サーバーと——更新——せん。
再——行い——データ——に】

「な…………一体何が——ぐあっ!？」

システムの声がぶつ切りになったと同時に暗闇の空間が異常な振動を起こす。

それに加えてヴィネルを激しい頭痛が襲う。まるで脳を高熱の何かで攪拌されているような得体の知れないそれに、ヴィネルは意識を霞ませる。

(エ、ラー? ……嘘だろ? ……こんなに…………苦勞…………して…………)

何かを掴もうと伸ばされたその手は、何も掴むこと無く力なく握られる。

暗闇の空間が崩壊し底が抜け、ヴィネルの体は音も無く何処までも落ちて行った。

メインクエスト・失われた記憶

熱い。そう感じて少年は目を覚ました。

開いた目に真っ先に飛び込んできたのは灰色の空。

曇天という訳ではない。周囲から立ち上る灰色の煙が青空を遮っているようだ。

「っ……なんだ、こりゃあ……」

少年はふらつきながらも体を起こすと辺りの惨状に息を呑んだ。村が燃えていた。石と木で作られた質素な家屋も、小さな教会も、少年のいる広場の中央にそびえる巨木も、全てが業火に焼かれていた。

そして少年は気づく。何も燃えているのは家や木だけではないということに。

匂いだ。それは『慣れ親しんだ』異臭。その匂いが人の体を高温で焼いたときに発せられる匂いだということを少年は知っていた。

そこで少年は違和感を覚える。慣れ親しんだ、とはどういう事だろうかと。

少年に人が焼ける匂いを嗅いだ記憶はない。

記憶、そこに思い至ったとき、少年は先ほどよりも強い違和感を感じた。

此処は何処だ？ 自分は何者だ？

必至に思い出そうとするも、手がかりすら掴めない。しばらくかけて、少年は自分が何も憶えていないことを知った。

「なんなんだよ……これ……」

気持ち悪い。ひどくめまいがする。まるで今にも地面が崩れそうな錯覚に陥る。

自分の拠り所とする物が何も存在しない。

それがこれほどまでに人を不安定にさせるということを少年は初めて知った。

深呼吸をして気分を落ち着かせる。

なんとか立ち上げられるほどにまで回復したとき、まるでそれは見計らったかのように現れた。

【クエストを受理しました。『メインクエスト・失われた記憶』】

ポン、と小気味よく宙に現れたのは半透明な水色のウィンドウ。

クエストウィンドウだ。少年は知識からそう判断する。

まるで何度も繰り返し返した動作のように少年はウィンドウを操作する。

すぐにクエスト内容が表示された。

【『メインクエスト・失われた記憶？』 燃え盛る村の真ん中で目を覚ました貴方は今までの記憶を全て失っていた。原因も何も分からない。残されたのは今まで培っていた知識のみ。まずは自らが何者かを知る必要がある。——インベントリからIDカードを取り出し自身の情報を得よ——完了0/1】

「インベントリ……IDカード」

知っている。何のことは無く、ただ頭の中で指示するだけだ。

流れるような動作で少年はインベントリからIDカードを取り出し、そこに表示されている情報を見る。

「名前は…… ヴィネル。職は『鳳鬼』。称号は『炎獄の超越者』レベルは1…… 歳は19か」

ヴィネルは頭の中で何度も反芻する。それだけでも心は大分平静を取り戻してくる。

『失われた記憶?』のクエストが完了状態になる。
すぐに次のクエストが現れた。

【『メインクエスト・失われた記憶?』 自身の情報を得た貴方はひとまずの平静を取り戻した。しかし、そんな貴方に敵の影が迫る。生き残るためには戦うしか無い。敵が現れる前に戦闘準備を整えるのだ。——パッシブスキル『炎化』を取得し、インベントリ内にある鳳鬼専用の防具を装備せよ——完了0/2】

「敵……ていうか戦うのかよ?」

ヴィネルは自分にそう問いかけるが、まるで戦うのが当たり前の事のようにすんなりと飲み込める。

そう云う風に生きてきたのだからかとヴィネルは漠然と思い浮かべた。

ヴィネルはスキルウィンドウを表示させるとスキルツリー最上部に位置するスキルを選択する。

パッシブスキル『炎化』。体を炎に変え自在に操ることが出来るスキル。

最初から持っていたスキルポイント1を使用して『炎化』を取得する。

これによって斬撃などの物理攻撃は無効。気を付けるのは魔法のみ。

次いでインベントリを表示させる。

中身は少なく、幾つかの消費アイテムにその他のアイテムは一つしか無い。

『幽世之鬼衣^{かくりよのおにじぬぎ}』衣から足袋まで一つのアイテム扱いとなる全身一体型のセットアイテムだ。

ランクはレジェンド級に位置しているが初期状態から装備が可能となる珍しい防具。

効果は脚力200%上昇。単純に考えて走る速度が3倍になるようだ。

ヴィネルが装備を指示するとバサリと音を立てて着用される。今まで身につけていた服は布の服、革の靴としてインベントリ内に収められていた。

見た目の印象がガラリと変わる。その姿を一言で言い表せば『幽鬼』という言葉がしつくり来る。

血の気を感じさせないまでに白い肌。肩まで真っ直ぐに伸びる焼き尽くされた灰のようにくすんだ髪。

とある国で死装束と呼ばれる物に近しい真白の衣はヴィネルを死者のように彩る。

そのなかでも異様なのは女性的に整った顔立ちに灯る炎のような紅蓮の瞳。

ゆらゆらと陽炎のように揺らめくその瞳はもはや人の物とは思えなかった。

これで戦える、とヴィネルが準備を整えるとクエストが完了し、新たなクエストが現れる。

それと同時にモはや跡形も無い村の入り口から4人の男達が現れ

る。全員が血に濡れた刀剣の類を持ち、その格好から彼らは盗賊のように見える。

【『メインクエスト・失われた記憶?』 戦闘準備を整えた貴方の前に敵が現れる。彼らは貴方が『紅蓮の瞳』を持つ者だと知るや否や襲いかかってくる。——盗賊に扮した男達を倒せ——完了0/4】

「『紅蓮の瞳』……? 盗賊に扮したって……盗賊じゃないのか?」

ヴィネルは疑問に思っ て 呟くが答えは出ない。

そうこうしている内に男達はヴィネルの姿を捉える。途端に怯えるように剣を構える。

どうやら敵で間違い無いようだ。ヴィネルはそう確信すると同時に地を蹴った。

「おい、なんだありゃ?」

盗賊の格好をした男の一人が声を上げる。

彼の視線の先には白い男とも女とも思える人影が立っていた。

「……隊長の言った通りか。でも、あんなヤツいなかったよなあ?」

「ああ、殺した奴の中にはいなかった。となると、どっかに隠れていたか」

男達は特に警戒もせず近寄っていく。十分に視認出来る距離ま

で詰めたとき、一人の男が気づき声をあげる。

「おい……あの瞳、『燃えて』ないか？」

ギクリとその場に居た全員の体が硬直する。

確かにその瞳は燃えているように見えた。今なお燃え盛る村の炎に紛れることを許されない確かな炎がそこにあった。

「戦闘態勢！ 『紅蓮の瞳』だ……油断するなっ！」

「おいおい……マジかよ」

「眉唾もんだって言ってたの誰でしたっけ……」

愚痴りながらも統率された動きで刀剣を構え態勢を整える男達。それは見るからに盗賊では無いと判断出来るほど見事なものだった。

だが、口々に言葉を発する中で最も口数の多いジェイスだけが黙っていることに気づいた男達は冗談めかしながら口を開く。

「おいおい、ジェイス！ ぶるってんのか？ あんなひよろひよろした——あれ……何処に消えた？」

瞬きをした瞬間に消えた白い標的を探すべく男達は周囲を見回す。そして、ようやく後方から匂ってくる何かが焦げた異臭に気づいた。

3人が同時に勢い良く振り返る。その場に居た全員が表情を引きつらせた。

炭化していたのだ。男達がジェイスと呼んでいた者は今やただの炭となり地面に投げ出されている。

そしてその隣に居る白い標的——ヴィネルはその細い右腕を紅蓮の炎に変えながらニタリと嗤った。

「まずは一匹……」

「お、のれ！　よくもジェイスを——！」

「よせ、ルノー！」

ルノーと呼ばれた男が突出し立ち向かう。

だが、剣を振り上げるよりも速くヴィネルの紅蓮の右腕がその胴を薙いだ。

「が……は……」

「はい、二匹目！」

崩れ落ちるのを待たずに止めが刺される。

あつけもなくやられるその様によって出来た思考の空白を突くようにヴィネルは腕を振るう。

一気に伸びた紅蓮の右腕がもう一人の胸部を刺し貫き、体の内部から焼き尽くす。

これほどまでに凄惨な殺し方をしても眉一つ動かさないヴィネルを前に残された男は恐怖で動くことができなくなっていた。

「三匹目つと、後はアンタだけか」

「助、け……て」

「ダメだ……殺さないとクエストが終わらないだろ？」

男の眼前に着たヴィネルは男の手に握られる剣を物ともせず
に立つ。

殺される。男はそう確信し絶望する。だが――

「――待てい！！」

野太い声がビリビリと辺りの空気を震わせる。

男達がやってきたのと同じ方向から全身鎧を着た大男が姿を現す。
その姿が目に入った盗賊姿の男は瞳に希望を宿す。

「た、隊長！」

「へえ、隊長さんが居たんだ……」

男が大男のほうへと顔を向けると同時にヴィネルは紅蓮の右腕を
振り下ろし、男を一気に炭化させる。

ヴィネルはそのままちらと見ることにせずクエストウィンド
ウを開き内容を確認し始める。

【『メインクエスト・失われた記憶？』 どうやら盗賊に扮した男
達にはリーダーがいたようだ。――隊長格であるその男を倒せ――
完了0/1】

ヴィネルは内容を確認すると一つ頷いて隊長格の男へと向き直る。

「やっぱり……お次は隊長さんみたいだ」

「『紅蓮の瞳』……お前のような化物がまさか本当に存在している
とはな」

「化物って……非道い言いようだな」

隊長格の男は背負っていた物を手に取り構える。それは巨大な刀身を持つ片刃の野太刀だった。

男は尋常では無い威圧感を放っているが、ヴィネルは何処吹く風と云った表情で相対している。

炎が辺りを蹂躪し続ける中、隊長格の男は吠えた。

「ロディアス帝国軍所属ガンズ・グロード！ いざ、紅蓮の瞳を持つ化物を討ち取らん！」

「一応言っておくけど……俺は人間だからな！」

地面が弾けるほどの勢いでヴィネルは駆け出す。
対するガンズはその場で野太刀を大上段に構えた。一刀両断の構え。

高速で迫るヴィネルをガンズはその目に捉える。愚直なまでに一直線に迫り射程範囲に入ったヴィネルを標的に野太刀が勢い良く振り下ろされた。

ガンズは頭、首、胸、腰、の順に見事に両断する。

だが、ヴィネルは全身を炎に変えてなおも前進してゆく。

勢いを全く殺すこと無く、炎と化したヴィネルはガンズの巨体を貫き通し、焼き尽くした。

「……お、前のような……人間が、居る……ものか」

その言葉を最後にガンズは事切れた。

クエストが完了すると同時にヴィネルの体を光の渦が包み、レベルアップを表した。

ヴィネルは燃え盛る村の中でたった一人立ち尽くす。

戦闘で得られた高揚は既に無い。何も、無い。人を殺した後悔も、何も。

「……人間なんだからしょうが無いだろ。現実を否定すんなよ」

現実。ヴィネルは知識として仮想の現実が存在することを知っている。

もしかしたら、今の俺は——そこまで考えて思考を無理やりに終わらせる。

自分が認識する此处こそが『現実』なのだ。

ヴィネルは自分にそう言い聞かせてクエストウィンドウを開く。

【『メインクエスト・記憶を求めて』　ひとまずの危機を乗り越えた貴方は、これから先にはさらなる危機が待ち構えている。既に運命に囚われた貴方は逃げる事は出来ない。生き残り、記憶を取り戻すためには戦うしかないのだ。——完了0/1】

「……逃げることは出来ない、か——ハハッおもしれえ。やってやるっじゃねえか」

絶対に生き残って、ついでに記憶を取り戻す。

紅蓮の炎に燃え散らされる村を背にヴィネルは前に進むことを決めた。

『未来視』 メリル・フォルテ・ロディアス（前書き）

主人公不在話！

『未来視』メルル・フォルテ・ロディアス

とある城の一室。昼間だというのに遮光カーテンや暗幕で暗闇を作った部屋があった。

部屋の中にある光源はただひとつ。それは白い洒落たテーブルの上に作られた盤上にあった。

それは燃えていた。盤上にある駒の一つ——兵士^{ポーン}を表すそれが煌々と燃え上がっている。

まるでチェス盤のように見える盤上にはその他にも様々な形の白い駒が無秩序に配置されていた。

燃え上がる駒やその他の駒を見て、部屋の主である少女は唇を歪める。

嘘に思えるほど整った顔立ち。ゆるくウェーブを描くサクラ色の髪と華奢な体つきによってその容姿は可憐な花を思わせる。

少女の名はメルル・フォルテ・ロディアス。このロディアス帝国を統べる皇帝の実子であり、『未来視』を持っていると噂されている人物だ。

メルルがテーブルの上に置かれていた真紅のベルを手に取り鳴らして待っていると、すぐに扉をノックする音が響く。

「入rinaさい」

「はっ、失礼いたします」

少女が許可すると、慇懃な動作で部屋の中へと入ってきたのは屈強な男だった。

左目を両断するように走る傷が特徴的で、その姿は歴戦の勇姿を思わせる。

ロディアス帝国の紋章が刻まれた鎧とマントを身につけていることからかなりの身分であることが見受けられる。

男は一旦は膝について跪くも、テーブルの上に燃える駒を見た途端、驚愕の表情を浮かべながら思わず立ち上がる。

「これは……まさか……」

「ええ、十中八九『紅蓮の瞳』の仕業でしょう。ルベリエ、兵士にも一応は耐火の魔法を付与した鎧を与えたはずでしたよね？」

「はっ、間違いありません」

「……私の『未来視』の上を行かれましたね。どうやら想定より遙かに強い力を持っているようです」

やれやれと首を振る少女からはその容姿に似合わない程の強かさを感じ取れる。

ルベリエと呼ばれた男はメルルの言葉に純粹驚いた。メルルの『未来視』が凌駕されるのを見たのは初めてのことだった。

そして、それを容易く行った『紅蓮の瞳』に畏怖の念すら感じる。果たしてそのような存在に牙を剥いていいものか、とルベリエは不安に駆られる。

「メルル様、果たして本当に『紅蓮の瞳』を持つ者を討つ必要があるのでしょうか？ それほどまでに強大な力を有しているならば彼の者が欲する物を与え、帝国の力として運用したほうがよろしいのでは？」

「随分と饒舌ですね、ルベリエ。まさか臆した訳では無いでしょう？」

「は、はっ！ そのようなことは決して……」

「ならば黙って従うことです。 まだまだ想定^{リザイン}の範囲内…… 兵士^{ボーン}が取られたからと言って投了^{チェックメイト}しては王手詰なんて夢のまた夢となり果てます」

否応無く従わされるような威圧感に、ルベリエは思わず膝を折る。可愛らしい外見をしていても、やはり『あの皇帝』の娘なのだと実感していた。

「とはいえ、このままでは難なく国外に逃げられかねません。 追撃しなければならぬのですが、装備を整え直さなければ騎士^{ナイト}や司祭^{ビショップ}まで取られかねませんね……」

「……それならば、兵士級を何人が捨て駒にしましょう。 その間に装備を整え、そののち一気に叩くのです」

「ふむ、それしかありませんね。 では兵士^{ボーン}を3つ捨て駒に。 そして、最上級の装備をさせた騎士^{ナイト}と司祭^{ビショップ}の2つで討ち取りましょう。 場所は……」

メルルはそこで言葉を切るとチェス盤上に視線を這わせる。

しかしその瞳はまるで虚空を見つめるかのように虚ろな物だった。 ルベリエが黙ってその様子を見守っていると、メルルは突然、まるで年頃の少女のようにクスリと笑った。 その様子は可笑しい物を見せられて思わず笑みが溢れてしまったように見えた。

「ふふっ……んん！ ごめんなさい、あんまり可笑しいものだから、つい……… 配置場所^{ボーン}は兵士^{ボーン}をリゲルデ村^{ナイト}へ。 騎士^{ナイト}と司祭^{ビショップ}は迷宮都

市デザイルへ向かわせなさい」

ルベリエは予想外の物を見て目を丸くしていたが、正気を取り戻して口を開く。

「了解致しました。——『紅蓮の瞳』もし、捕獲することが出来れば如何しましょう。薬や魔法で洗脳するという手も……」

「殺しなさい」

即断。冷たい刃を首筋に当てられているかのような錯覚にルベリエは襲われる。

身動きの取れないルベリエに言い聞かせるかのようにメリルは囁くように声を出した。

「絶対に捕らえてはいけません。『紅蓮の瞳』はこの国を崩壊させる証なのでから」

メリル・フォルテ・ロディアスは国を守るために戦う。

道中の不覚

【『メインクエスト・帝国からの脱出？』 『紅蓮の瞳』を持つ貴方を危険視し、ロディアス帝国は追手を放ったようだ。幾度も追撃を受けていては記憶を取り戻すための手がかりは探せない。——帝国から脱出するために迷宮都市デザイルへ向かえ——完了0/1】

そのクエストが現れたのが5日前のことだ。

GPSマップにて場所を確認したヴィネルは心底面倒そうな表情を浮かべた。

それもそのはず、GPSマップに表示されていた目的地マーカーの場所は、ヴィネルが居るところから目算で歩いて2週間以上かかる場所にあった。

その日から延々と5日間、ヴィネルは歩を進めていた。

だが、この5日間は決して無駄では無かった。

ヴィネルは知識にも無かった自分の体について幾らか気づいたことがあった。

『食事』と『睡眠』これが必要無いのだ。

ヴィネルの知識は自分にとってそれらが必要だと言う事を教えてくれるのだが、当の体はそれを要求しない。

道中で見つけた木の実などを食べても味はするのだが腹が膨れないのだ。

ヴィネルは何度か必要の無い『食事』を行うことで自身の感覚を掴むことに成功していた。

イメージ的には体内に入った物が全て燃焼されているような感じだ。

体が炎になる『炎化』の副作用とヴィネルはなんとなく思うことにしていた。

睡眠も同様の事、体が要求しない。

これについてヴィネルはエネルギーが有り余っているからか、と当たりを付けるが既に5日も睡眠を必要としていない。

そこで知識の一つに引かかる物があつた。

それは鳳鬼の特徴の一つに体力の異常な回復率が上げられることだ。

人が睡眠を取るのは一重に休息のためというのが大きい。

もしこの回復率が関係しているのなら睡眠が必要無いのは納得出来ることだ。

というよりもヴィネルは特に気にしていなかった。

自分は『食事』も『睡眠』もいらない。それでいいじゃないかと楽観的に歩き続けている。

だが6日目の太陽が高く昇った頃、ヴィネルはどうすべきか迷っていた。

「うーむ……」

ヴィネルは街道に面した草原で腕組をしながら唸りを上げていた。目の前には見事な焼け野原。つい先程までここは緑が綺麗な草原だった。

犯人は言わずもがなヴィネルなのだが、何も故意にやってのけた事では無かった。

「どうしたものか……攻撃するたびに焼け野原が出来ちまう。草原だからまだいいが……森の中だと確実にヤバイな」

道中、何処からか湧いて出たモンスターを攻撃すると決まって炎が飛び火し周囲を焼いてしまう。

制御しようと気を張りながら腕を振るうが、周囲の空気を巻き込んで燃え盛る炎は無駄に広がってしまう。

何度かの試行の後、工夫でどうこうするのは無理だと悟ったヴィネルは最後の手段を使うことに決めた。

「スキルで何とかするしかねえか」

ヴィネルはそう呟くとスキルウィンドウを開く。

現在所有しているのは『炎化』Lv・1とスキルツリーからは外れた位置にある『ペインロスト』Lv・50『業炎極化』Lv・50『魔弾』Lv・50だ。

『炎化』以外のスキルはもと『道化』のパッシブスキルだという知識はあるのだが、ヴィネルにはそれがどういった経緯で手に入っただかの記憶は残っていない。

恐らく失われた記憶に含まれているのだろう、とヴィネルは気にしないことにした。

スキルポイントの残りは1だと表示されている。

取得出来るスキルは一つのみだ。

『凰鬼』のスキルは大きく分けて3つの種類がある。

まずは格闘や剣術などの近距離スキルを主とする系統。

そして火球や火壁などの遠距離・中距離スキルや補助スキルを主とする系統。

最後に自身の姿を変貌させるスキルを主とする系統。
ヴィネルは便宜的に『近接』『魔法』『変身』と各系統を呼ぶことにした。

現在取れるスキルには近接系統の『烈火』、魔法系統の『砲火』がある。

これは最初に取った『炎化』のLv・1取得が前提となるスキルだ。

各スキルには取得に必要な前提条件が設定されており、それを満たすことで取得することが出来るようになる。

ヴィネルが目を付けたのは近接系統の『烈火』だ。

『烈火』は無形の炎を圧縮し完全な固形とするスキルで、炎ダメージに加えて打撃ダメージも与える攻撃スキルだ。

これを取れば無駄に攻撃範囲が広がることも無いだろうとヴィネルは迷わず取得した。

【スキル『烈火』Lv・1を取得しました】

「よし……『烈火』」

スキルを発動させると同時に両腕が赤熱したような状態になる。ヴィネルが屈んで小石を手にとってみると熱が伝導し赤く染まっていく。

上手く使えることを確信したヴィネルがスキルを解除すると、元の白い肌と袖に腕が戻る。

このスキルはオンとオフを切り替えるタイプであるトグルスキルのようなのだ。

環境の安全を確保したヴィネルは満足しながら再び歩き出した。

「ええい、遠い……」

周囲の風景を観察したり、現れるモンスターをあしらったりしながら進んで来たヴィネルだったが流石に6日も同じだといい加減に飽きてくる。

しかしGPSマップを確認してみると大分進んでいた。ヴィネルはこの分だと3、4日で着くだろうと予測する。

そんなヴィネルは手元のIDカードとにらめっこしながら歩いていた。

「……増えてないよな」

ヴィネルの視線を釘付けにしているのはカードの最下段に表示された経験値のパーセンテージ。

そこには10%と表示されているが、これは6日前に燃えた村を出発してから変わっていないのだ。

モンスターを倒しても変わらないこの数値を前にヴィネルは首をひねる。

ヴィネルはモンスターを倒すと経験値を得られることを知っていた。しかし、いくら倒しても変化が無い事でそれは間違いなのではないかという思いが浮上していた。

現在のレベルは2。あがり盛りの伸び盛りはずだ。

そうして周囲への注意を怠っていたからか、ヴィネルは背後から迫るそれに反応することが出来なかった。

「ケーツ！」

「……ん？」

突如として背後から現れた黒い鳥がヴィネルの手に持っていたIDカードを奪い取る。

くちばしにカードを加えた鳥は器用にケーケーと鳴き声を反響させながら徐々に離れていく。

ヴィネルが状況を理解した時には既に飛び道具を投げて届く15メートル以上の距離を余裕で離されていた。

「え……ちょっと、おい！？ 待てやコラ！！」

ヴィネルは急いでGPSで地図を拡大して周辺マップを呼び出す。敵勢の存在を示すマーカーの有効範囲は50メートル。そのぎりぎりの位置で鳥のマーカーを捉えた。

自分の不覚を呪いながら、ヴィネルは街道から逸れIDカードを追うために駆け出した。

一般クエスト・辺境の巨大猪

IDカードを奪った黒い鳥を追ってたどり着いたのは小さな村だった。

GPSマップ上では『リゲルデ村』と表示されている。
ヴィネルは迷う事無く入り口から入ろうとするが――

「待ちな、兄ちゃん！」

「ん？」

入るその寸前で呼び止められる。

ヴィネルを呼び止めたのは剣を背負ったガタイの良い男だ。
革製の服を基本に金属製の胸当てやガントレットを付属したバトルアーマーを身につけている。

門番だろうか、と判断してヴィネルは口を開く。

「あー、悪い……実は街道のほうで鳥にカードを奪われてな。そいつを追って来たんだ」

「なんだ、兄ちゃんも冒険者か……その鳥なら村長んとこいるはずだぜ。村の一番奥の家だ」

男はそう言うのと道を開け、入り口のところにどかりと座り込む。
ヴィネルは冒険者？と首をかしげそうになったがなんだかすんなり通れそうだったので我慢することにした。
そうして村の中に入れたのはいいのだが、なにやら様子がおかしい。

妙に殺気立っているようにも見える上に、余所者なヴィネルを訝

しげな視線で見つめてくる。

（なんかあったのかねえ……でもまあ俺には関係ねえか。ＩＤカードを取り返したらさっさと進むでしょう）

ヴィネルはＧＰＳマップで鳥が居る場所を割り出すとそこへ向かう。

そこは確かに入り口にいた男が言った通り村の一番奥にある家だった。

ヴィネルが扉をノックすると「どうぞ！」という快活な女性の声が返って来る。

扉を開いた先には一人の女性が件の黒い鳥に餌を与えていた。

「ほんつとうにごめんなさい！！」

「気にしないでくれ。俺としては戻ってくるだけで十分だから」

本当に申し訳なさそうに頭を下げる女性にヴィネルは逆に自分が悪いように思えてくる。

なにせ、この女性が謝るのは５回目なのだ。

別にそこまで頭に来たわけでは無かったのでヴィネルはそろそろ勘弁して欲しいと感じる。

街道で起こったことを説明すると目の前の女性はすぐに理解してくれた。

軽く自己紹介した結果、女性の名はキリカというらしい。

亜麻色の髪を束ねた女性で、村一番の美人だと教えられてもやっぱりかと思えそうなほど顔が整っている。

キリカの話によるとこの鳥、最近同じようなやり方でギルドカードなる物を奪ってくるらしい。

しかも持ち主が追いつけるようにしてこの村に冒険者を呼び込んでいると言う話だった。

ヴィネルとしてはギルドカードなんて物は知らないし、既にIDカードも自分のところに帰っているのですぐにでも立ち去りたいところなのだが……。

「ささ、喉渴いてますよね？ お水どうぞ、お水！」

「……ありがとう」

この水も三杯目である。質素なテーブルに座らされて水をご馳走になる。

ヴィネルの対面にキリカは座り、その様子をじっと見つめている。そういえば食わずには過ごせるけど飲まずはどうなんだろうか。と、ぼんやり考えてても間が持たないと思いヴィネルは口を開く。

「あー、この村ってなんかあったの？」

「……えっと、どうしてですか？」

「なんか妙に殺気立ってるように見えるからさ」

表情を曇らせるキリカを前にしまったとヴィネルは後悔する。

とは言っても会話が通じるとすればこの村のことしか思い浮かばなかったのでは仕方ないとも言える。

「……ヴィネルさんは、神様って居ると思いますか？」

突然の問いかけにヴィネルは首をかしげるものの、キリカの表情が真剣そのものだったために思わず考えさせられる。しばしの沈黙を破ってヴィネルは口を開いた。

「居るんじゃないの」

「……こんなに、非道い世界なの？」

非道い世界というのが理解出来なかったヴィネルは適当に当たりを付けて続ける。

「そりゃアレだ。捨てる神あれば拾う神あり。神様ってのは何人もいて、どいつもこいつも気まぐれな野郎共なんだよ。だけどそんな気まぐれな奴でも一応は神様で、良い奴に拾ってもらえば良い思いが出来る。逆もしかりだ。今不幸なもの、これから不幸になるのも全ては俺達を握る神様次第ってな？」

「……神様が何人も居るって言う人は初めて見ました」

「ただの言葉遊びだ。そう重く受け取って欲しくは無いね」

「それじゃあ私は——」

突如、キリカの言葉を遮って怒声が響き渡る。

家の外では何かが起こっているようだ。

金属音、罵声、嘲笑。

程なくしてこの家の扉が開く。

扉を開けて現れたのは鎧を着た二足歩行の『猪』だった。

「お迎えだぞ……ぐっひっひっひ」

「……はい」

獣が人の言葉を喋り下卑た声で笑うという事態にヴィネルは思考停止していると、キリカはそれに従うように席を立つ。

言葉が見つからないヴィネルにキリカは今にも泣きそうな顔で笑いかけた。

「私……神様に捨てられちゃったみたいです」

ボタン、と音を立てて扉が閉められてもヴィネルは微動だにしない。

なおも思考停止していると今まで大人しかった黒い鳥が騒ぎ立て始めた。

ヴィネルの頭上をばさばさと飛び回る。

「ケエー！！ ケエー！！」

「お、おお！？ あ、あぶねエ。意識が那由他の彼方まで吹っ飛んでたぜ……猪つてのは喋るんだな。知らなかった」

「ケエエエエー！！！！」

「うつるせー！！ なんだよ、なんだよ？ ご主人様助けるってか、ああ？ というか事情は全く知らないし、俺に得はないしなあ。いや、まあ、神様云々と猪の言動でなんとなく悪そうな状況だなーとは思っけどよ………ん？」

キリカは鎧を着た猪の先導でリゲルデ村の中央にある広場に連れられていた。

広場の隅には抵抗したとおぼしき村人や冒険者が血を流しながら倒れている。

広場の中心にいた『ソレ』は巨大な口を開けて笑っている。

「ぐあっはっはっはっは！ 人間ごときが俺に敵うものか！ 俺は『牙の王』フォングだぞお！？」

それはキリカの目の前に居る猪よりも遙かに巨大な猪だった。ゆうに人の二倍はある。

さらには同じように二足歩行し鎧を身につけている始末だ。

自らを『牙の王』フォングと名乗るその存在は、何日前にリゲルデ村付近にある森に現れ、そこを拠点にして周辺の村や街道を行く商人などを襲っている魔物だ。

誰も立ち向かうことが出来ないほどの強さに帝都に救援の使者を出すも、その使者が殺され救援を呼べないという事態に陥っていた。

加えて、帝都に使者が辿りつけても討伐隊が編成されるのは絶望的だと村の住人は考えていた。

魔物の力を移植された帝国の『強化人間』が辺境の村を無秩序に襲っているという噂を誰もが耳にしていた。そのせいで既にこの国から人心は離れていると言っても過言では無い。

そして、フォングはリゲルデ村にある一つの要求をした。

それは生贄の献上。村で最も美しい娘を渡せば村を荒らす事はしないと言うのだ。

村人は憤り、道行く冒険者も雇って抵抗するも——結果は見ての通りだった。

先導していた猪はフォングの後ろに控えて行く。

キリカはフォングの前に毅然と立ちながら口を開いた。

「……私が行けば。本当に村の皆には手を出さないんですよ？」

「ん？……ああ、そんな約束だったなあ。いいだろう手を出さないとも」

ぞんざいに頷く様子にキリカは不安を覚えるがこれ以外に選択肢が無い。

と、そんな中倒れていた一人の男が立ち上がる。

血まみれで立ち上がるその姿は見るだけで痛々しくなる。

「キリカは……わた、さん」

「お父さん！？もうやめて！」

その姿を見てキリカは思わず声を上げる。

だがその静止を聞かずにゆっくりと男は歩を進めようとす。

「人間ごときが逆らうか……おい、お前ら遊んでやれい！」

「そんな！？約束が違う！」

「ああ？約束う？がっはっはっは！俺は手を出していないぞお？……おい、何をチンタラやってる？さっさとあのゴミを片付け——」

突然、パンパン、と手を打ち払う音がやけに大きく響く。
耳が痛いほどの静寂が広がっていく。

そんな中、その静寂を作った主はそれを軽い調子で壊す。

「モンスターって不思議だよな。死ねば数十秒で体が崩れて塵になる。一体どういう原理をしてるのか……『魔王』を詐称するフONGさんは知ってるのかい？」

フONGの後ろに控えていた猪をいつの間にか焼却していたヴィネルはキリカとフONGの間に割って入った。

死装束の背中をキリカは呆然と見つめながら声を搾り出す。

「なん……で……？」

「ん？ ああ……アンタはただ運が良かっただけだよ。言っただけ？ 捨てる神あれば拾う神あり。ほんと、ラッキーだったな——アンタ別の神様に拾われたぜ」

クエストウィンドウが表示される。

『メインクエスト・帝国からの脱出』の下に新たなクエストが追加されていた。

「『一般クエスト・辺境の巨大猪』 迷宮都市デザイルへの道中で貴方は巨大な二足歩行の猪型モンスター『ブルオーク』と出会う。ブルオークは魔王の証である『王名』を名乗るが、それは単なる自称だった。——魔王を詐称するブルオークを討伐せよ——完了0/1」

ヴィネルはキリカを下がらせると同時に『烈火』を発動させる。

「お仕置きつてレベルじゃ済まさねえからな。塵に還りな」

瞳の中の炎を煌々と燃やし、ヴィネルは嗤う。

陽炎のように揺らめくその姿をフォングは驚愕と畏怖に塗れた瞳で見つめ、やがてポツリとこぼした。

「……『紅蓮の王』」

『烈火』で形造られた炎の腕がその体を焼き切ったのはその直後のことだった。

「……あっけねえな。そしてまた『紅蓮』、揃いもそろって炎が好きだねえ」

いかにも期待はずれだという表情でヴィネルは『烈火』を解除する。

足元にはブルオークだったものが文字通り塵に還っているところだ。

IDカードを確認すると経験値は50%を表示していた。

（経験値の収入源はクエスト、か。モンスター倒しまくって一気にレベルアップするのは無理なわけね）

さて、とヴィネルは周囲をちらと確認する。

誰もかれもが恐怖に満ちた視線を投げかけていた。

（はあ……化物扱いされる前に出るとしますかね）

自分の体が普通の人間と異なるということを自覚しているヴィネルはさつさと退散することに決める。

塵を蹴散らして歩き出したヴィネルを呼び止める者が一人居た。

「あ……あの！」

「……何？」

ヴィネルは振り向くと今にも崩れそうな笑顔を浮かべたキリカが目に入る。

その目に宿っているのは純粹な安堵。

「——ありがとうございます！」

「……おう、拾ってくれた神様にも感謝しときな」

人助けも悪く無い。

そう思いながらヴィネルはリゲルデ村を後にした。

去っていく死装束の後ろ姿を物陰から伺う3つの影があった。

3人は皆一様に帝国の紋章の入った全身鎧を着ている。

だが、その姿は騎士というよりも山賊や盗賊の類と言われたほうがしっくりくる見た目だった。

3人は顔を突き合わせながら言葉を交わす。
ターゲットである『紅蓮の瞳』が巨大なブルオークを一撃で倒す様をバッチリ目撃していた彼らの意見は全員一致していた。

「無理だ！」

「無理つす！」

「無理無理！」

速攻で結論が出たのだが、彼らは動かない。
彼らは上官から直々に『紅蓮の瞳』の捕縛を命じられたのだ。
手ぶらのままで帰還出来るわけがない。
ではどうするかという話なのだが――。

「デザインに行こう」

一人がそう言うつと残りの二人は頭上に？を浮かべる。

「なんで迷宮都市に行かなきゃなんねえんだよ。やるなら関所破りだろうが」

「いいや……あそこにある迷宮の一つにはメルティエ王国へとつながる出口があるらしいんだ」

「ああ！聞いたことあるな」

「ふーむ……だが公にはされてないんだろ？ 見つけるのは時間がかかるんじゃないのか？」

「考えても見る。関所破りなんてしたら一発でお尋ね者だ。それなら冒険者の振りして迷宮からメルティエに逃げたほうが後が楽だろう？」

3人はニヤリといかにも小物そうな顔で笑う。

『紅蓮の瞳』の行き先が、迷宮都市デザイルだとも知らずに。

迷宮都市に漂う暗雲

『迷宮都市デザイル』は地下に張り巡らされた巨大迷宮の上に作られた都市だ。

幾重もの階層と広大な領域を持つ迷宮は未だに全貌を明らかにしていない。

迷宮内には金銀財宝が山のように眠り、誰も見たことがないモンスターも存在しているとのことだ。

そのおかげというべきか、一攫千金を夢見る者達や未だ見ぬ強敵を求める怖い者知らず達で構成される冒険者達が連日都市を賑わせている。

都市の運営は絶対中立組織『ギルド』が主に受け持っており、迷宮に挑戦しようとする冒険者の管理も行っている。

『ギルド』はどの国家にも存在し、クエストという形で依頼を受注したり、各国家の情報をいち早くとどけたりとその用途は様々だ。ここの迷宮都市では冒険者のランクに応じて挑戦出来る階層や領域を制限することで、冒険者の無駄な死を回避しているのだ。

「6番でお待ちの方、3番カウンターまでお越しく下さい」

「あ、俺だ」

ヴィネルは迷宮都市について書かれたパンフレットから顔を上げる。

彼が居るのは迷宮都市デザイルの中央に位置するギルド支部の中だ。

リゲルデ村を出てから数日、何事も無く無事に到着することが出来ていた。

ギルド内はかなりの広さを誇っていた。

酒場のようなカウンターが3つほど並び、それぞれ受付が立っている。

一番人気が多いのが奥のボードの周辺だ。ボードにはクエストの張り紙がされており、その周囲には見るからに冒険者と分かる者達が大勢いて、パーティやクエストの募集や情報交換などに勤しんでいる。

そんな中でフリースペースとも呼べる場所で椅子に座っていた真白な死装束を身につけているヴィネルはひたすらに目立っていた。今も立ち上がったヴィネルに視線を固定している者は多い。

だがその本人は気づいているのか気づいていないのか全く気にする素振りを見せなかった。

すぐに『？』と刻まれたカウンターへとたどり着く。

笑顔の眩しいお手本のような受付嬢がヴィネルを迎えた。

「お待たせいたしました！ ヴィネル様ですね。ギルドへの新規登録ということでしょうか？」

「ああ、そうだ」

ヴィネルは頷きながら肯定の意を発する。

ギルドへの登録は次に現れたメインクエストに必要なことだった。

【『メインクエスト・帝国からの脱出？』 ギルドランクをSまで上げた貴方は目的の階層まで進入出来る資格を獲得した。デザイル地下迷宮第73階層の隠し通路からメルティエ王国へと脱出せよ――
――完了0/1】

ヴィネルは初め、それを見たとき目を疑った。

このクエストが現れたのは『メインクエスト・帝国からの脱出?』の完了時、レベルアップと共に迎えたそれを見てヴィネルは思わず首を捻った。

『?』が省かれている。

『?』のクエスト内容からして『?』のクエストは『ギルドランクをSまで上げる』だったということが読み取れる。

もちろん到着したばかりでギルドの登録すらしていない状況にも関わらずその条件が達成されていることになっていた。

謎の状況に陥っているが、ヴィネル自身このクエスト自体がどういった物が分からない状態であり、とりあえずこのまま進めることに決めていた。

「ではこちらに必要事項の記入をお願いします」

ヴィネルは紙面に目を通し、必要事項を記入する。

大陸公用語で書かれた文字だったがヴィネルには難なく読み書きが出来た。

それがいつ、何処で覚えた物なのか……ヴィネルは記憶の端すら掴めないままだが。

名前、性別、年齢、と順調に書き進み、ある項目でそれが止まった。

「あ、どうかなされました？」

「いや……記憶喪失でな。出身地が分からないんだ」

「それは……わかりました。そちらは空欄でも構いません」

そこまで重要では無かったのか特に問題は無いようだ。

ヴィネルは出身地以外を埋めて提出する。

受付嬢はそれを受け取って傍らに置いてあった水晶玉に紙をかざして呟く。

「『登録認証』……………あれ？」

受付嬢は途端に驚愕の表情を浮かべる。

「どうした、何か問題が？」

「いえ……あの……既に登録されてるんです」

「……………なんだって？」

「記憶喪失って仰ってましたよね？　もしかしたら、それ以前に登録した物かもしれません。この場合、ギルドカードの再発行となります」

受付嬢はそう言う間にきばきと作業に移る。

ヴィネルが啞然としている間に水晶から光の粒子が溢れ出しそれが寄り集まった後には金色に輝くカードが出来上がっていた。

それを差し出され、なすがままにヴィネルは受け取る。

刻まれた情報を確認すると、確かに自分のものとはほぼ一致していた。

違っていたのは空欄のはずの出身地。そこには何故か『黄泉路』と刻まれている。

（黄泉路……ねえ。後でGPSマップで探してみるか——なんだ、こりゃ）

最下段に刻まれた文字を見た瞬間、ヴィネルは気味が悪い感覚に苛まれた。

最下段に刻まれた文字は『SSS』ギルドの最高ランクを表していたのだ。

最高ランク。何かの間違いかと二度見直したり、擦ったりするもその文字は変わらない。

さらには憧憬に満ちた受付嬢の熱っぽい視線が突き刺さり、ヴィネルはだんだんと居心地が悪くなってくる。

流石にこれは捨て置けないと思ったヴィネルは受付嬢に尋ねた。

「なあ……これは人違いとかじゃないのか？ 同じ名前の奴とか……」

「ありえません！」

受付嬢はきつぱりと否定すると、勢い良く立ち上がりカウンター越しのヴィネルへと身を乗り出してくる。

得も知れぬ恐怖に襲われヴィネルは一步身を引いた。

「いいですか。このギルドの認証システムは伊達じゃありません！ 実是用紙の記入に使用していただいたこの羽ペン！ なんと、特殊な材料と製法で造られており魂の伝導率がものすーごく高いんです！」

「そ、それで？」

「そんでもってこのペンで用紙に記入することで魂の情報をこの用紙に刻み、それをこの水晶玉で読み取ってるんや。だから間違いないで絶対に起こらないっちゅーわけや！！ 分かったか、じぶん！？」

大声で嬉々として解説する受付嬢にヴィネルは否応無く頷かされる。

途中からそれが地なのか分からないが、口調がえらく訛っていた。はっ、と正気に戻ったかのように表情を変えた受付嬢は静かに座りなおす。

「んんっ！ …… お分かりいただけましたでしょうか？」

「…… 十分すぎるほど分かった。ありがとう」

ヴィネルはこれ以上関わるとロクなことが無いという漠然とした不安にかられ、礼を行って足早に立ち去って行く。

受付嬢は接客用ではない笑顔でその後ろ姿を見送りながら、独り言つ。

「間違いない、ホンマものの『紅蓮の瞳』や。 …… こういうのを『僥倖』って言うんか？ ふふっ、面白くなってきたやん」

迷宮都市デザイル。商店や宿屋がある通りから離れた裏路地で3人の男達が言い争っていた。

「なんであの化物がここにいるんだよ！」

「誰だよデザイルに行こうって言い出した奴は……」

「お前だろうが、ちったあ反省しろ！」

「うるせえな！ てめえだつて賛成しただろうが！」

ぎゃあぎゃあと言い争っているのは帝国がヴィネルへと放った刺客だ。

彼らはずい先程この街に到着し、ギルドの扉を開けた瞬間目に入った死装束を前に脱兎の勢いでここまで来ていた。

彼らは既に戦意を喪失し、逃げることだけしか考えていない。

徐々にエスカレートしていく言い争いでついに一人が我慢の限界に達し腰にある剣を抜こうとしたとき、彼らはようやく気づいた。

「な……なんだ？」

「体が……！！」

「動かねえ！？」

どれだけ力を込めようと体が固定されたかのように動かない。動揺を露にする3人の前に一人の男が上空から現れる。

軽い音を立てて降り立ったのは紺色の司祭服を身につけた若い男だ。

「その格好……まさか『教会』か！？」

身動きの取れない状態で一人が叫ぶ。

魔を討ち祓う力を持つ『教会』の人間は、魔物の力を宿している
『強化人間』の天敵だ。

だが、司祭服の男はそれを聞くと呆れるように表情を歪めて黙っ
たまま左肩を指し示す。

そこには『ある象徴』が存在を主張していた。

「帝国の紋章！？ て、てめえ………ビショップ司祭級か！」

そう、そこには赤い龍を模した帝国の紋章があった。

「御機嫌よう。そして、さようなら——『ウォーターリングボール』
！」

言葉と同時に3人の頭部に水球がかぶさる。

もがこうとしても身動きが取れず、為す術も無いまま3人の男達
は溺死する。

まるで操り人形のようにだらりと力無く宙に浮かぶ死体は不気味
としか言いようがない。

だがその死体も、1分と待たずに塵へと還っていった。
強化人間も魔物と同じ末路を歩むのだ。

「逃げようなどと企むからですよ。しかしなんで私がこんな雑用を
……まあ、面倒な死体の処理が無いのでよしとしましょうか。しか
し……『紅蓮の瞳』は何処で捕えるのでしょうか。街中で騒ぎを
起こせばギルドが黙っていないでしょうし……そうになると、やはり
迷宮内ですね。とりあえず騎士級ナイトと合流しなければ」

とん、と軽い音と共に路地裏から男の姿が消える。

雲ひとつ無い晴天の下、ヴィネルの周りには暗雲が漂い始めていた。

パーティ結成

ギルド支部を後にしたヴィネルはとりあえず迷宮への入り口へとやって来ていた。

その様子を鑑みるに、ギルドランクのことがまだ気にかかっているようだ。

他者とは違う体、『紅蓮の瞳』、そしてギルドランク『SSS』。此処に来てようやく、ヴィネルは自分の過去が気になり初めていた。

「こうなったらマジで記憶取り戻さねえと気持ち悪いな……っここか」

迷宮都市デザイルの地下にある巨大迷宮にはワープポータルを使用して進入する形になっている。

迷宮内の階層も階段のように物理的に繋がっているのではなく、全てワープポータルによって繋がっている。それを利用してどのワープポータルからでも入り口に戻ってこれる仕組みになっているようだ。

迷宮内は階層毎に進入出来るギルドランクが決められており、10階層はランク『G』から、1120階層はランク『F』から、というように10階層区切りでランクが1段階アップする形になっている。

メルティエ王国へと脱出することが出来る階層は73階層なのでランク『S』から進入出来る形となっている。

入り口のワープポータルはそれぞれのランクに応じて一つずつ用意されており、CやBの使用率が最も高く、Aは少なく、Sに至っては利用されること自体が稀となっている。

そのためか探索の進行度が進んでおらず、今現在まで確認されている階層は73までとなっていた。

ヴィネルは全く人気のないSランクのワープポータルにたどり着くと早速迷宮へと入ろうとする。

既に進入方法はパンフレットで学んでいた。

宙に浮く青い水晶玉にカードをかざして言葉を紡ぐ。

「『進入認証』つと……お、きたきた」

水晶玉に進入出来る階層が浮かび上がる。

このギルドカードは本当に有効らしく、73階層まで進入可能とあった。

ヴィネルはパンフレットで学んだ通りに言語を紡ぐが……。

「73階層へ進入——あれ？」

水晶玉に浮かび上がったのは『進入不可』の文字。

何か間違えたかと再度試そうとするヴィネルに背後から声がかかった。

「あかん——あかんよ、じぶん。70階層からは熟練者でも危険やから2人以上のパーティやないと進入出来へんようになってるんよ」

ヴィネルが振り返ったその先にはホットパンツにジャケット、ロングブーツを履いた女性が立っていた。

身につけている物は黒のレザーに統一されており、左右の腰元には二つの短剣が鞘に収まっている。

その髪はそこらの影よりも濃い黒色をし、それをショートヘアにしていた。

月のない夜のような漆黒の瞳には、まるで光を吸い込んでいるような錯覚すら覚える。

無駄に露出が高く、スレンダーな体つきを披露するその美女は、特徴的な口調でヴィネルに話しかけてくる。

「お兄さん、もしかして困ってるんとちゃうん？　なんだったら協力してもええよ。そん代わりウチにも協力してもらうけど」

「……ギルドの受付嬢だよな。仕事はどうした、仕事は」

「んなつ……！　なんで分かったん！？　ウチの変装はバッチシ完璧やったのに！」

ヴィネルの言葉を受けて黒髪の女は取り乱す。

ヴィネルはさも当然という風に口を開く。

「や、そんな変な口調の女が二人も居るわけがないし」

「……辺境の村の訛りだったらどないすんねん」

「う……」

ジト目で見つめられてヴィネルは思わずたじろぐ。

あまりにも整った顔立ちは凶器だということをヴィネルは知った。

「……どないすんねん」

「うう……わ、悪かったよ」

ヴィネルがポツリと謝るとばあっと女は笑顔を浮かべる。

「まあ……この口調ウチのオリジナルやけどな！」

「って、それならアンタしか使う奴いねえだろ！」

カラカラと悪戯っぽく笑う女を前にしてヴィネルは嘆息する。
相手のペースに嵌っていることを自覚し、なんとかしようと考えるがその先手を打つように女は言葉を紡ぐ。

「じぶん、メルティエ王国に行きたいんやろ？」

「……なんで分かったんだよ」

ヴィネルは警戒心を露にする。

それを全く気にする事無く意味ありげに女は笑う。

「んっふっふ」内緒や。実はウチもメルティエに用があんねん。でも進入には『S』ランクを持つ相方が必要やし、その相方もメルティエを目指す奴やないとあかん。そうやないと迷宮内に1人取り残すことになるからのう。どや？ ウチも腕には覚えがあるから足でまといにはならん自信はあるよ」

ヴィネルはしばし思考する。

得体が知れない、とは思うものの渡りに船ではある。

何故目的がバレたのか想像もつかなかったが、ヴィネルは説明する手間が省けたと思うことにした。

『帝国の追手』という可能性も考えたが、クエストが出現していないことからとりあえずは大丈夫だと判断する。

（迷宮に入っちまえばどちらにしる同じか……もし追手なら潰せば

いいだけだし」

ヴィネルはそう判断し口を開いた。

「分かった……協力しよう」

「おお、分かってくれと信じてたで！　ウチはエリシアっていうねん。呼び捨てで構わへんよ。ほな、よろしゅうに！」

「ヴィネルだ。俺も呼び捨てでいい。……よろしくな」

それぞれの思惑を胸に双方とも笑顔で握手を交わす。

その日、二人はパーティーを結成した。

石で造られた通路をゆうゆうと歩くヴィネルとエリシア。等間隔で壁につけられた燭台が二人を煌々と照らし出す。

デザイルの地下迷宮内では基本的に紙で書いた地図は必要無い。ギルドカードにはマッピング機能が付随しており、踏破した場所の地図を自動で記録し、それを表示させることが出来るのだ。しかし今現在、ヴィネルとエリシアはその機能を使わずに迷宮内を進んでいた。

「ってか、なんちゅう便利なもん持ってんねん。それ、魔法か？」

ヴィネルの目の前の空間に浮かぶGPSマップを指で差して問う

エリシア。

その表情は興味津々と云った様子がありありと伺える。

「なんだろうな？ 自然と使えてたから良く分かんねえな」

エリシアがそう思うのも無理はない。

何故ならGPSマップには迷宮内を網羅しているとさえ思えるほどの情報が表示されていたのだから。

迷宮の構造はもちろんのこと、モンスターの位置、仕掛けられたトラップなどを完璧に表示していた。

「……ほんまに人間か、じぶん？」

割と本気そうに、しかも何故か見るからに嬉しそうにエリシアは問う。

ヴィネルはGPSマップから目を離さずに答えた。

「俺も、最近自信が無くなってきたところだ——お、モンスター発見。——『砲火』！」

GPSマップに出現した敵勢マーカーが射程内である25メートル内に入ると同時にヴィネルは立ち止まりながら『砲火』を発動させる。

『砲火』は火球を撃ち出すスキルで、『凰鬼』にとって基本的な遠距離スキルだ。

デザイル到着時にレベルが上がったヴィネルはそのスキルを取得していた。

レベル1だとせいぜい大人の頭程度の大きさの火球しか作れないが、パッシブスキル『業炎極化』の効果で性能が強化され直径約2メートルの大火球と化している。

立ち止まったヴィネルの眼前に現れた火球は数秒の滞空の後、轟々と唸りを上げて発射される。

『魔弾』の効果で絶対命中となった火球は曲がり角を直角に折れてなお進む。

爆音とモンスターの絶叫が離れたヴィネル達の元へと届く。

ヴィネル達の位置から見えないモンスターは何処から攻撃が放たれているのか分からないのか向かってくる気配はない。

あたりかまわず暴れまわっているようで振動がびりびりと伝わってくる。

『砲火』の再使用時間^{クールタイム}20秒を挟んで何度か砲撃すると、ヴィネル達の元には悲痛な断末魔が届けられた。

「ほんま、鬼やな……」

呆れた様子で呟くエリシアにヴィネルは感心した表情を向ける。

「へえ、よく分かったな。俺の職業は鬼だ」

「職業鬼！？ それ種族と違うんかい！」

勢い良く入ったツツコミにヴィネルはしばし思案して口を開く。

「……『凰鬼』って職業は？」

「んなもん、あるかいな。聞いたこともあらへんわ——ってか何する職業やねん」

「主に戦闘だとは思うんだが……」

エリシアの即答にむう、と唸るヴィネル。

謎ばかり増えていく。そんな状況にそろそろ飽食気味なヴィネルであった。

灯る紅蓮、迫る運命

73階層に進入してから数時間が経過する。

ヴィネルとエリシアはモンスターやトラップの脅威に晒されることなく、ついには巨人用に造られたとは思えない巨大な扉の前に無傷で辿り着いていた。

「うつわー……見事にウチ何もしてへん。折角ウチの華麗な短剣技を披露してヴィネルに、キャー！ カッコイイー！ ステキーー！
みたいな黄色い声出させよう思ってたのに……」

「んな声を誰が出すか……まあ、そこまで自信があるなら近接戦は任せるとするかな」

わーい！ と嬉しそうにはしゃぐエリシアを尻目にヴィネルはGPSマップに目を落とす。

そこにはこの先にある大部屋に隠し通路があることを示していた。それを見たエリシアは「やっぱりここか」と呟く。

話によると、一度ギルド主催の探索クエストで潜ったときに当たりをつけていたとの事だった。

エリシアはそうそう、とたった今思いついたように口を開く。

「そういえばヴィネルは炎以外は操れるん？」

「いや、無理だな」

『凰鬼』には炎系統以外のスキルが存在しない。

中には『烈火』のように物理ダメージを伴うスキルも存在するが、別系統の属性は取得出来ない。

ヴィネルがそう答えるとエリシアは困ったように悩む。

「あちゃー……どないしよか」

「何か問題でもあるのか？」

「この先の部屋にな、ブラッディドラゴンがおんねん。それをどうにかせんと進めへん」

『ブラッディドラゴン』は炎系統の竜種『レッドドラゴン』の上位種であり並の冒険者では全く歯の立たないモンスターだ。

体はその名の通り血のような赤黒い色の鱗で覆われているのが特徴で炎を操るモンスターの中ではトップクラスの实力を持っている。だが、ヴィネルはその情報を持っていない。

思わず首をかしげてしまうヴィネルにエリシアは申し訳なさそうな表情で言葉を続ける。

「あ、記憶が無いんやったな。すまんすまん……『ブラッディドラゴン』は炎系の竜種でな、炎が効かないねん。それでヴィネルが炎以外扱えるか聞いたんやけど……」

「あー……確かに相性最悪だな」

厳密に言えば『知識』は残っているのだが特に言及することでもないヴィネルは判断した。

ヴィネルはエリシアへと向けていた視線をGPSマップへと向け直す。

大部屋の中には敵勢マーカーが二つ表示されていた。

おそらくはそのどちらかが話に上った『ブラッディドラゴン』だろう。

意外なところで壁が立ちはだかりヴィネルはしばらくの間思い悩む。

「……スルー出来ねえのか？」

ヴィネルが出した結論は『受け流す』。所謂、君子危うきに近寄らずである。

炎が効かないとなると、ヴィネルによる攻撃は殆ど封じられたと言っても過言ではない。

『烈火』による物理ダメージはあくまでおまけ程度であり大した期待は出来ない。

ましてやドラゴンのような硬質な鱗を持つモンスターを対象にすれば毛ほどのダメージも与えられないだろう。

ヴィネルの提案にエリシアは思案する。

「うーん……気配を最大限まで消せば何とか行けるかもしれない。ウチは慣れてるから余裕やけど、ヴィネルはどう？ 出来る？」

「気配を消す……具体的にどのくらいまで？」

「んー……このくらい」

そう言った瞬間、エリシアの姿が音も立てずに掻き消える。

それは気配を消す、というレベルではなく、完全に世界から消えたように見えた。

ヴィネルが絶句し、キョロキョロと前後左右を見渡している内に先ほどと全く同じ位置にエリシアの姿が現れる。

エリシアは誇らしげな表情でヴィネルに聞く。

「どや？」

「無理です」

即答。エリシアの気配を消す技量を以てすればドラゴンごときの目を欺くなんて余裕だろうとそう思わせるには十分な代物だった。そこでヴィネルはたと気づく。

エリシアだけでも『消える』ことが出来るなら行けるんじゃないか、と。

「エリシア、今みたいに気配を消しながら隠し通路を通れるか？」

「よほど変な造りやなければ行けると思うで。何か思いついたん？」

ヴィネルはエリシアに作戦を説明する。

その作戦は単純な物だった。

まずヴィネルが先に大部屋の中に進入する。

そしてヴィネルが中にいるモンスターの注意を引きつけている内にエリシアが気配を殺しながら進入。

GPSマップで隠し通路の大体の位置を予め確認しておき、エリシアはそこへ向かう。

エリシアが無事に隠し通路へと入ってからヴィネルも隠し通路へと脱出する。

説明を受け終えたエリシアは心配するような瞳でヴィネルを見つめる。

「……じぶん、それで大丈夫か？」

「ああ、俺は体を炎に出来るから爪とか牙は……あ」

至近距離での上目遣いに内心鼓動を早めていたヴィネルはうつかりと舌を滑らせる。

自身の体が一般とはかけ離れていることを自覚しているヴィネルはしまった、と内心焦るが――

「へえ、それなら案外いけそうやな。でもいくら体が炎に出来るいうても油断したらあかんで？ ドラゴンのプレスを受けたらダメージは負うやろうし……何へんな顔してんの、じぶん？」

「えつと……驚かねえの？」

恐る恐る聞くヴィネルにエリシアは不思議そうな表情を浮かべた。その様子は何を当たり前の事を、とでも言いたそうに見える。

「確かに珍しいけど……そう云う体の奴も他におるで？ 特に今から行くメルティエ王国には他の国よりも多いはずや」

「へえ、そう……なのか。――くっ……ははっ、あはははははは……」

エリシアの軽い口調でもたらされる情報にヴィネルは突然、高らかに笑い声を上げる。

驚いた表情のエリシアが見守る中、ヴィネルは天を仰ぎしばらく笑い続けた。

やがて、顔を下ろしたヴィネルの相貌を見てエリシアは息を呑む。

まるで何かが吹っ切れたかのようにヴィネルのその表情は勝気に満ち溢れていた。

儚げな印象を与えるような顔立ちにも関わらず、エリシアはヴィ

ネルのそれに獣のような寧猛な力強さを感じる。
そんな中、エリシアが魅入られていたのはその瞳。

その瞳は燃えていた。

先ほどまでのような揺らめく炎ではなく、全てを灼き尽くし灰塵へと還しそうな業火だ。

触ればただでは済まされない。そう悟らせるには十分な地獄の猛火を宿している。

その瞳は正しく『紅蓮の瞳』と呼ぶに相応しい物となっていた。

「んだよ……気にする必要なんて無かったか」

「え……あ……うん」

ヴィネルはぽーっとなったまま動かないエリシアの顔の前で手を上下させて正気に戻す。

燭台の灯に照らされたその顔は、まるで恋する乙女のように赤く染まっていた。

「ん……おい、顔赤いけど大丈夫か？」

「あ、赤っ———そ、そんなことあらへんわ！　これは……その……あれや、燭台の灯に照らされてるだけや！」

「……さいですか」

「ホンマやで!？」

「いや、もう分かったっての。……とりあえず行こうぜ。今のテン

シヨンならドラゴン相手に素手でも何とかなる気がする。主に気合で！」

「や、それは無理やろ」

エリシアのツッコミを受けながらヴィネルが巨大な扉を手で押すと、重たいそれは軋みをあげながら開いていく。

刻々と逃れられぬ『運命』が近付いていることを、ヴィネルは未だ知らない。

『メインクエスト・帝国の追撃者』？

巨大な扉が軋みをあげながら開いていく。

露になった大部屋の中は今までの通路と違い明かりが無い。

どろり、と絡みつくような錯覚をもたせるほど濃厚な暗闇を前に
ヴィネルは顔をしかめる。

そういえば松明があったとヴィネルは気づき、インベントリから
松明を取り出す。

何も無い空間から現れた松明を前に、エリシアは目を白黒させて
いたが背を向けていたヴィネルは気づくことはなかった。

松明に着火するとヴィネルの周囲7メートルほどの闇が晴れる。

ヴィネルは後ろに待機しているエリシアに行くぞ、と声をかけて
から大部屋の中に進入した。

大部屋は通路と同じ種類の石で出来ており、特にこれと言った障
害物は無かった。

壁には通路と同じ物の燭台があるが火は灯されていない。

ヴィネルはGPSマップを表示させ、その上に表示されている敵
勢マーカーに向かって進んで行く。

部屋の最奥に面した壁付近にある二つのマーカーは微動だにしな
い。

マーカーとの距離が20メートルを切ったところで突如として全
ての燭台に火が灯り、暗闇を打ち払う。

突然明るくなったことで眩しそうに目を細めるヴィネル。

その視線の先には2人の『敵』がいた。

「おや、本当に此处に来ましたね。……全く、あのお方の『目』は
どこまで見えるのやら」

「……必然」

紺色をした司祭服の男と全身を隈なく鋼で覆った騎士甲冑の男が口々に呟く。

全貌が露になった大部屋の中にはブラッディドラゴンは存在せず、目の前の2人しかいない。

初めからいなかったのか、または倒されてしまったのか。
ヴィネルの直感の後者だと告げていた。

好都合だ、このまま隠し通路へ突破してしまえ。そうヴィネルは判断した。

手に持っていた松明を投げ捨てるだけで敢えて何もせずに事態を静観する。

だが、次に起こった2人のアクションでヴィネルは動かざる負えなくなった。

「ふむ……どうやら隠れるのが上手なネズミがいるようですね。——ドエイン、殺していいですよ。位置の補正は必要ですか？」

「無論、不要」

呟きながら背負っていた岩のようにゴツゴツした大剣を騎士甲冑の男は流れるような動作で構える。

そのまま金属の重低音を響かせながらヴィネルから見て右の壁、隠し通路があり今はそこにエリシアがいるはずの場所へと突進していく。

速い。全身を鋼の甲冑で身を包んでいるとは思えないほどの速度で男は地を駆ける。

「——チッ！」

ワンテンポ遅れてヴィネルは舌打ちをしながら地を蹴ると、大剣を構え地を駆ける男の前に立ちはだかる。

割って入ったヴィネルを視認した男はその勢いを殺すこと無く大剣に唸りを上げさせながら右から左へと振るう。

斬撃というよりは殴打のような一撃を相手にヴィネルは体を炎に変えて受け流した。

「仰天……！」

「それなら上を向きな！」

右腕を炎に変えたヴィネルは、大剣を振り切ったままな状態の男目掛けて腕を振り下ろす。

炎がまるで意思があるかのようにのたうち回り騎士甲冑の全てを包み込んだ。だが――

「……笑止」

「なっ――！？」

焼かれてもなお男は大剣を構え直す。

確実に殺つたと確信していたヴィネルは予想外の出来事に絶句する。

それに追い打ちをかけるかのように司祭服の男が声を轟かせる。

「――『アクアエンチャント』！」

声に呼応するように騎士甲冑の男の足元に青く輝く魔方陣が出現する。

それと同時に甲冑から大剣まで含んだ全身を青いオーラが包み、ところどころに残っていた炎が音を立てて消え去った。

『アクアエンチャント』は武器や防具に水の属性を付与する魔法だ。

炎属性に対しての属性防御能力の付与、雷属性に対する属性防御能力の減衰。

さらには武器の攻撃時に水属性のダメージが追加される。

ヴィネルが現象を理解するよりも早く、今度は左下から右上へと逆袈裟の軌道で大剣が振るわれる。

大丈夫だ、効かない。そう判断してヴィネルはその攻撃を無視する。

結果は同じだった。青いオーラを纏う大剣はヴィネルに傷一つつける事無くその体を通して。

「くっ……」

だが、その瞬間ヴィネルに強烈な喪失感が襲いかかった。

斬られた時に生じるはずの激痛は無いが、体の中から何かが流れだすような未知の感覚にヴィネルは思わず膝を付きそうになる。

足元をぐらつかせるヴィネルの背に特徴的な訛りの声が届いた。

「ヴィネル、こっちや！」

ヴィネルが振り向くと先ほどまで無かった壁に一人分ほどしか無い通路が出現していた。

エリシアが隠し通路からこっちへ来いと手招きする。

ヴィネルはそちらへ向かおう足に力を込めるが、甲冑の男がそうはさせんと体を動かす。

「あかん！ 後ろや！！」

肩越しに振り返ると軽々と持ち上げられた大剣が頭上高く構えられていた。

不味い、と瞬時に判断しヴィネルはとっさに横方向へと身を投げ出してなんとか躲す。

だが、男の本当の目的はヴィネルを叩き潰すことではなかった。

「——『ロックアウト』」

石造りの床に食い込む大剣を起点に岩が隆起する。

怒涛のように連続するそれはまたたく間にエリシアのいる隠し通路に迫りその入口を岩で隙間無く塞ぐ。

「エリシア！！」

ヴィネルはエリシアの名を呼ぶが返事はない。

無事だといいいのだがと心配が首をもたげるが瞬時に頭を切り替え目の前の敵に集中する。

甲冑の男から距離を取り、すぐさま立ち上がったヴィネルは先ほどまでの喪失感を殆ど感じられない。

代わりに同じ何かが流れ込んでいるような感覚を臍気ながらに感じていた。

未知の感覚に戸惑う中、新たなクエストが現れる。

【『メインクエスト・帝国の追撃者』 デザイル地下迷宮第73階層で貴方は帝国の追手に襲撃を受ける。貴方の力を警戒する彼ら是对炎用の装備・魔法を備えているようだ。——強化人間『騎士級^{ナイト}』ドエイン、『司祭級^{ヒショップ}』レルードを倒せ——完了0/2】

ヴィネルはそれを一瞥して嘆息する。

強化人間が何者かヴィネルは知らなかったが、どうやらドラゴンよりも厄介そうだと漠然と思う。

どうするか、と決めあぐねていると先手を打つように司祭服の男

——レルドが口を開く。

魔法に警戒してヴィネルは体を強ばらせるが、レルドはそのつもりは無いようだった。

「おやおや、あまりそう警戒なさらず……今の非礼は詫びましょう。私はロディアス帝国軍所属

『^{ヒシヨップ}司祭級』強化人間のレルドと申します。そちらの『^{ナイト}騎士級』がドエイン。以後お見知りおきを『紅蓮の瞳』」

「……コイツはご丁寧にも。俺の名はヴィネルだ。その変な呼称で呼ぶのはやめろ」

「了解致しました。ヴィネル様、ですね。私の話を聞いていただけますでしょうか？」

レルドは丁寧な物腰でヴィネルに語りかける。

ヴィネルはあからさまに訝しげな表情を見せるがやがて「聞かせろ」と先を促す。

了承を得たレルドは微笑を浮かべながら口を開いた。

「簡単に申し上げますと、貴方に帝都ジェルクまでお越しいただきたいのです」

「………なんでか聞いてもいいか？」

「ええ。我らが皇帝、デイラー・フォルテ・ロディアス陛下は貴方という存在を欲しいとお考えのようです。中には貴方を危険視して排除すべきだと言う者もいますが――陛下の意思は絶対ですから危害が及ぶことはありません。ご安心ください」

どうやらこれは勧誘のようだ。

ヴィネルは記憶を失う以前に皇帝と交流があったのか？ と自身を疑う。

「なんで俺なんだ？ 言っちゃなんだが俺は皇帝だの何だのが執心するような人間じゃないぞ」

「――『紅蓮の瞳』。曰く、その瞳を持つ者は帝国を揺るがし崩壊させる力すら持っているとか……そのような馬鹿げた存在なら是非手に入れたいと皇帝はおっしゃられましてね？ 聞き入れていただけない場合は……捕縛せよと命じられています」

「ハツ……そいつは面白い。お前らは炎を縄で縛れるのか？」

思わず浮かんだヴィネルの嘲笑にレルードの表情がだんだんとサディスティックな色を帯びていく。

人を獲物として見ているような視線で射ぬかれながらも、ヴィネルはその視線を真っ向から受け止めながら構えた。

これは予定調和。答えは既に決まりきっている問答だ。

何のことはない。目の前の2人はクエストの『ターゲット』なのだから。

ドエインがレルードとヴィネルの間に割り込み大剣を構える。

前衛と後衛がきつぱりと分かれたコンビのようだ。

ヴィネルは挑発するように手招きする。

「来いよ、教会で他人の懺悔でも聞いてたほうがマシだったって思わせてやるよ」

「それでは貴方の懺悔で耳を潤すとしましようか。悲鳴を伴うとなおよしですが」

レルードの言葉を皮切りに、ヴィネルは脚部に力を込めると地面を這うように跳んだ。

「——阻止」

後衛のレルードへと肉薄するがその行く手をドエインに阻まれる。振り上げられる青いオーラを纏った大剣。

ヴィネルの脳裏に先ほど感じた奇妙な感覚が想起される。

舌打ち一つ。ヴィネルは袈裟懸けにされるのを恐れ身をかがめて躲す。

大剣が勢い余って床を叩き割ると同時にヴィネルはドエインの懷に潜りこんだ。

「——『烈火』」

ヴィネルは『烈火』で形成した掌で兜を鷲掴みにする。

常人が触れれば炭化は免れない焦熱が襲っているはずだが、ドエインは動きを止める気配が無い。

「——無益」

無造作に振るわれる大剣に胴を薙がれながらもヴィネルは後退して距離を取った。

再び喪失感がその身を襲い思考を揺さぶられながらもヴィネルは歯噛みする。

二度の攻撃を直撃させても動きが鈍ることのないドエインを前にヴィネルは属性防御の脅威を痛感させられた。

属性防御は炎や水、風などによる属性的なダメージを減衰させる力を持つ。

クエストの内容には対炎の装備をしているとあった。

それに加えて水属性の付与により炎属性であるヴィネルの攻撃が大幅に減衰されているのだ。

今のドエインは倒せない。

そう判断したヴィネルはまず先にレルドを叩くべく駆け出す。作戦は強行突破。大剣を振り回し迎撃するドエインを突き抜けるように地を蹴る。

腹を真一文字に切り裂かれまたもヴィネルを喪失感が襲うが、覚悟していたヴィネルはそれを押し殺してドエインを通過する——成功。

「——『砲火』」

ヴィネルは走りながらも『砲火』を発動させると、勢いよく発射された火球がレルドへと迫る。

「——『アクアシールド』」

レルードの眼前に巨大な水の盾が出現し、火球を受け止めて蒸発する。

だが、その間にヴィネルとレルードの距離が10メートルを切る。殺れる。ドエインの速度はヴィネルを上回っていないため追い付かれることはない。

ラストスパートのためにヴィネルは地を蹴って跳び——そのまま宙に固定された。

「……は？」

啞然とするヴィネルの体は全くピクリとも動かない。

時間が停止したのかと思わせる光景を前にレルードはしてやったりといった表情で笑う。

「んっふっふっふ！！ まんまと掛かりましたねえ……ここまで事が上手く運ぶと逆に罠に掛けられてる気分になりますよ」

「一体何が……」

「申し遅れました。私、グランドスパイダーの力を移植されてまして……獲物を捕えるのは大得意なんですよ」

レルードの声を受けてヴィネルは自身の体に目を凝らすと、至る所に糸が絡み付いているのがかるうじて分かった。

グランドスパイダーは主に森の中に生息する魔物だ。

木々の間に不可視性の高く強靱な糸を張り、そこを通った獲物を餌食にする。

レルードはその特徴を受け継いだ強化人間だった。

トリックが分かれば対処は容易い。

ヴィネルは全身を炎に変えて脱出しようとするが、体だけが燃えるばかりで捕らえられたままだ。

再度糸を注視したヴィネルは全ての糸がうつすらと青いオーラに包まれているのが分かった。

「既にエンチャント済みですからねえ、無駄ですよ。そして、今の貴方にこれを避ける術は無い」

レルドの眼前に青色の魔方阵が描かれる。

その表情は狂氣的に歪み、サディスティックな本性を顕にしていた。

「一応は弱らせるつもりですが、この程度で死ぬようならどの道要らないでしょう——『ハイドロブラスト』！」

魔方阵から激しい勢いの水柱が放たれる。

動けないヴィネルにそれは直撃しその体に絡み付いていた糸を断ち切りながら地面とは水平に飛ぶ。

壁まで到達した水柱はようやくその勢いを止めた。

壁に叩き付けられたヴィネルはぼろ雑巾のように床に投げ出される。

急速に何かが流れ出す感覚と共にその視界は徐々に色を失い、やがて闇に閉ざされていった。

『メインクエスト・帝国の追撃者』？

—— 酷く、寒い。

何度かの『ソレ』を受け、ヴィネルは漠然と理解していた。

『ソレ』とは得体の知れない喪失感。何か大事な物が流れ出る違和感。

流れ出ていたのは『生命力』だ。

自分の体がダメージを負ったときにそれは失われていた。同時に満ちていく感覚があったのは『回復率』。

今、ヴィネルの体はその『回復率』による『生命力』の充填よりもダメージ量が大きく上回っていた。

本来なら痛みによってもっと早く理解していただろうが、今のヴィネルに痛覚は存在しない。

—— もう、何も見えない。

今にも掻き消えそうな風前の灯火を宿す瞳はヴィネルに暗闇しか届けない。

—— もう、何も出来ない。

ヴィネルは試しに力を込めてみるが、体が上手く動かない。せいぜい指先で床を弱々しく引っ掻く程度だ。体は火の粉のかけらにすらなりはしない。

—— 死ぬのだろうか？

そう思った途端にヴィネルは心臓の鼓動がやけに大きく感じた。それは恐怖だった。人が誰しも持つ根源的な恐怖。カチカチと歯が音を鳴らす。

それは恐怖から来る物なのか、それともただ寒いだけなのかヴィネルには判別出来なかった。

ただ、一つだけ分かったことがあった。

——覚えている。

ドクン、と心臓が跳ねる。

やがて、暗闇が流れ落ちるように溶けてゆき水浸しな石の床を映しだす。

——この感覚を体は覚えている。

地に這い蹲り、死を感じたことも。

何度も何度も繰り返して、折れそうになったことも。

それでもなお、立ち上がったことも。

——ソレハ『スベテ』コノ『ゲンジツ』ノタメニ——

ヴィネルは限界を訴える腕に鞭を打って動かす。

インベントリから最高級ポーションを取り出すと、赤い液体の入ったフラスコがその手に握られる。

ヴィネルはその栓を片手で開け、それを一気に飲み干した。殆どを失われていたはずの生命力がそれで一気に充填される。

ずぶ濡れのぼろ雑巾のようになっていたその姿が炎に包まれると元通りとなっていた。

紅蓮の瞳にレルードとドエインが慌てた様子で警戒するのが映し出される。

それを見るヴィネルの表情には恐怖が見え隠れしている。生命力を失うことで知った死への恐怖はそう簡単に拭えない。

だが、それでも前へと突き動かされる。

果たしてそれが自分の意思なのか、かつてあった自分の記憶から来るものなのか、それとも見えない誰かが背中を押すからなのか、ヴィネルには分からない。

強くならなければいけない。この『現実』で最強にならなければ

漠然と思い浮かんだそれを胸にヴィネルは紅蓮と化す。

瀕死だと目に見えて分かる状態だったヴィネルが立ち上がった事でドエインは驚愕する。

だが、相手は普通では無いのだと無理やりに思考を切り替える。

『アクアエンチャント』の恩恵を受けている限り負けはない。

狙いは確実にレルードとなっているはずだとドエインは断定する。

だが、ヴィネルは一直線にドエインの元へと駆けて来る。

困惑するドエインだったが射程内に入ったヴィネルをとりあえず迎撃する。

右から左へと横薙ぎに一閃。ヴィネルはそれを身を屈めて躲す。

予想通りの動きにドエインは次の手を放つ。

大上段に振り上げてからの振り下ろし。

わざとヴィネルの位置からずれた床に叩きつけた瞬間に魔法を発動させる。

「——『ロックシザーズ』」

ヴィネルの足元の床が隆起し岩の顎門あぎとがその足を食いちぎらんと迫る。

弱点を突く属性ではないが土属性の魔法でダメージは与えれると判断しての手だ。

ヴィネルはそれをジャンプして躲す。

宙に浮き無防備な体躯に向け、ドエインは下から上へと斬り上げその体を薙ぐ。

見事に真つ二つなったヴィネルは炎へと姿を変え——そのままだドエインの眼前まで踏み込んで来た。

油断していた。何度か斬ったがその都度大なり小なり体勢を崩していたことでドエインは今度もそうなるはずだと考えていた。

だが、今のヴィネルは全く体勢を崩さずに立っている。

まるでそれが当然と言わんばかりの表情で立つヴィネルはドエインの顔面に何かを押し当てる。

ドエインは視界が塞がれてそれをなんとかしようとするよりも早く、押し当てられたそれはヴィネルの腕ごと『爆発』した。

あらゆる防御力を無視する『爆弾』がドエインの兜を安々と吹き飛ばす。

ドエインの素顔が露になる。その顔は岩のようにゴツゴツとした髑髏だった。

ドエインは土属性の魔法を操る『ガイアスカル』という魔物の力を移植されていた。

人と相入れぬはずのその力の影響か、ドエインは魔物の姿に変貌していた。

「おもしろい顔してんなあ……それで焼かれても平気ってか？ まあ、灰になるまで焼いてやるよ——『烈火』」

ヴィネルは『烈火』を発動し、その頭部を鷲掴みにする。

防具に付与された属性防御も、エンチャントも、直にその力を叩き付けられれば意味をなさない。

レルードはドエインをサポートしようと動くが——

「デメエは邪魔すんな——『砲火』！」

火球が発射されレルードは瞬時に水の盾を生成して攻撃に備えるが——火球はレルードの足元に着弾し炸裂する。

炎と煙の中に消えるレルード。

やがて、ドエインの手から大剣が落ち耳障りな音を立てる。

高熱で焼かれもろくなった髑髏をヴィネルは一息で握り潰した。

後衛だがレルードも炎に耐性を持つ装備はしているはずだ、とヴィネルはレルードの方へと向き直る。

レルドは未だに燃え盛る炎の中に居るようだったが、このまま『砲火』を何発か叩き込んでやろうと構えている時にそれは起こった。

大部屋の中——否、迷宮内が突如として鳴動する。

まるで迷宮自体が哭いているかのような錯覚にヴィネルは思わず耳を塞いでしまう。

壁にある燭台の灯が一つ、また一つと消えて行き、ついにはレルドを包みこんでいた炎すらも消え去ってしまう。

完全な闇が当たりを支配すると同時に、ヴィネルの足元に銀色に輝く魔方阵が現れた。

「っ——なんだ!？」

驚いて魔方阵から飛び退こうとすると、虚空から銀の鎖が伸びヴィネルを捕える。

抵抗する暇も無く、ヴィネルは魔方阵の中へと引きずり込まれて行った。

「げぼっ……一体、何が？」

完全な暗闇の中、レルドは身を起こした。

耐火の装備と『アクアエンチャント』のお陰で大事には至らない

がそれでもそれなりのダメージを受けていた。

（ドエインは……やられたでしょうね。あのままだったら私も……これが一体どういうわけで起こったのかわかりませんが、僥倖と恵っておきましょう）

レルードはボロボロの体を何とか立たせ、歩き出そうとした矢先、その背に声がかけられる。

その声は場違いなほど明るく陽気な口調だった。

「いつやー、こりやえらい派手にやったもんやのう。どんだけ元気有り余っとるっちゅうねん。なあ？」

レルードは声のしたほうに振り向くが闇が濃すぎて姿が見えない。ここにいるとすれば考えられるのは『紅蓮の瞳』と一緒にいた女しかありえない。

だが、ドエインが塞いだはずの通路からどうやって戻ってきたのかレルードは想像出来なかった。

「いや、でも強化人間ってえらいビビったわ。まさかウチを追って来たんかーって思ったら狙いは『紅蓮の瞳』やったし。まあウチがかたしても良かったんやけど、ヴィネルがどのくらい出来るのか見とくのもええと思つてな？ 傍観しとつてんねん」

聞いてもいないことをべらべらと勢い良く喋る女の声にレルードは苛立ちを募らせる。

ある程度目が慣れて来るとレルードの目に女のシルエットが映しだされる。

レルードはその方向へと無造作に魔法を放った。

「——『アクアジャベリン』！」

宙に魔方阵が描かれ、中から3本の水の槍が放たれる。
槍が暗闇の中に消えると、女の慌てたような声が響き渡る。

「うわわっ！ え、ちよつ————こらあ！ 危ないやないかい！
？ 串刺し一歩手前やったで！？」

レルードは舌打ちをすると再度同じ魔法を放つべく口を開くが、
それよりも女の行動のほうが目まぐるしかった。

「はあ……もうええわ、じぶん——『ダークネスウィップ』」

女の声と同時にレルードの四肢に何かが絡みつки、身動きを取れ
なくする。

それを見たレルードは目を疑った。その手足に絡み付いていたの
は闇が固形化したような鞭だった。

レルードは途端に青褪める。その力には見覚えがあったのだ。

この帝国で皇族を除き最も逆らってはいけない人間が持つ力。

彼女は皇帝に並ぶ力を持っているとされる異色の『強化人間』。
闇を操る非道の魔女『女王級』エリシア・ローゼルクス。

「何故……何故貴女が『紅蓮の瞳』と一緒に居る！？」

レルードは最大の疑問をエリシアへとぶつける。

だが、返ってきたのは巫山戯ているとしか思えない答えだった。

「乙女の秘密やで？ そうペラペラ喋るもんでもないわ。それに、

じぶんお喋り嫌いそうやしもう終わりにしよか——『カニバルベーズ』」

エリシアが言葉を紡ぐとそれに呼応するように闇が凝り固まってい

く。そうしてレルードの頭上に出来上がったのは、巨大な牙を生え揃えた異形の大口だった。

恐怖の悲鳴を上げることすら許されず、レルードは文字通り闇に喰われた。

後には暗闇と静寂が広がる。

そんな中、エリシアはヴィネルが魔方陣に引きずり込まれた辺りを見つめながら心底楽しそうに呟く。

「はてさて……『紅蓮』か『銀鎖』か、どちらが出てくるんやろ？
それとも両方とか？　ウチとしては……ヴィネルが出てくると、
これからも楽しめそうやな」

暗闇の中一人佇み嗤う魔女の瞳は、暗闇にあってなお融け込まない深淵の色を誇っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1409s/>

3rd-Real

2011年4月11日21時04分発行